

# 西洋近代絵画の見方・学び方（参考文献）

## 木村三郎

再改訂 二〇一八年八月

### 今回の改訂方針

今回は、二〇一五年九月に公開した際の改訂版と比べ、以下の点に重点を置いている。

今回の改訂でも、無論、前回以降三年間に生まれた、当該研究テーマに関する、多くの新しい研究成果を追加している。しかし、今回は、以下の点に特に力点を置いた。西洋十七世紀絵画を学ぶ際には、しばしば、隣接領域である、建築史、政治史、経済史、社会史、文学史、音楽史、宗教史等の分野の基礎知識が求められる。しかしながら、そのために必要になる入門書の選定は、美術史を学ぶものには、必ずしも容易なことではない。以上の趣旨から、この領域についての調査結果を、とりわけ、76〜79頁に記述している。

## はじめに

このサイトは、放送大学叢書の中にある拙著『西洋近代絵画の見方・学び方』（二〇一一年）に書かれた内容を補足するものである。この叢書は、美術史に興味を持たれた方々が、西洋近代絵画の見方、そして調べ方を紹介するものである。従って、読みやすさを旨としており、過剰か専門的書誌情報を書き込むことを避けている。その結果、書かれた内容についてより深く調べたいという関心を持たれた読者の要望には応えられていない。この頁は、そうした要望に應えるために作られている。なお、この著書は、拙著『美術史と美術理論』（放送大学教育振興会、一九九二、一九九六年）を、大幅に改訂したものである。章立ても大きく異なっているが、本論には、それ程の異同がない章もある。

第一部 「西洋近代絵画の見方」では、拙著の各章には書き込まなかった参考文献を記述してある。

第二部 「西洋近代絵画の学び方」は、西洋近代絵画史研究のための、西洋美術文献和書資料のための書誌学入門を目的としている。

なお、本サイトに記述されている文献は、大半が、日本大学芸術学部図書館に収蔵されている。実際に参照を希望される方は、同学部OPACを参照されたい。  
<http://artlib.cin.nihon-u.ac.jp/opac/expand-query?mode=2>

## 凡例

省略記号

AB誌：The Art Bulletin

BM誌：The Burlington Magazine

千葉大・報告書：千葉大学人文社会科学研究所プロジェクト報告書

DA：The Dictionary of Art

EWA：Encyclopedia of World Art

フルルテイエール：FURETIERE(A), Dictionnaire universel, La Haye et Rotterdam, Chez A. & R. Leers, 1690, 3 vols. : 復刻版 Paris, Le Robert, 1978

ぶくろう：河出書房新社、叢書・ぶくろうの本

JWCI誌：Journal of the Warburg and Courtauld Institutes.

JWI誌：Journal of the Warburg Institute

科研報告書：科学研究費成果報告書

木村『イエズス会』：拙著『ニコラ・プッサンとイエズス会画像の研究』中央公論出版、二〇〇七年

木村『フランス近代』：拙著『フランス近代の画像学』中央公論美術出版、二〇一八年

望月『プッサン』：望月典子『ニコラ・プッサン・・・絵画的比喩を読む』慶応義塾大学出版会、二〇一〇年

Pbk : paperbacks

新版世界各国史：山川出版社、叢書・新版新版世界各国史

UP : University Press

『ス・ラ美術史研究』：スペイン・ラテンアメリカ美術史研究

『ベラスケスとバロック絵画』：『ベラスケスとバロック絵画』：影響と同時代性、  
受容と遺産』二〇一六年、公開国際シンポジウム報告集（早稲田大学・豊田唯、坂  
本龍太編）

ZKG 誌 : Zeitschrift für Kunstgeschichte

このサイトでは、和文中心の文献案内となっているが、十七世紀絵画研究でも、個別画家研究や時代概説的性格のものは、他の文献案内に譲っている。それらは、検索調査が比較的容易だからである。欧文資料に関しては、初学者向けという趣旨から、独仏伊語などで書かれた文献は原則として避け、英語文献でも入手が比較的容易なペーパーバック版のもの、または、比較的どの美術系図書館でも入手が容易な、美術百科事典、あるいは雑誌に掲載されたものに絞った。また、欧文原著の書誌事項は、原則として、英語版ペーパーバックを除いて、著者名原綴と刊行年だけとした。より専門的に学ぶ意志のある学生諸君ならば、これだけでも検索のきつかけになると考えたからである。

## 第一部 西洋近代絵画の見方

### 西洋絵画史の通史

ハンディーな入門書としては、ウツフォード『絵画の見方』（岩波書店、叢書・ケンブリッジ西洋絵画の流れ・第八巻、邦訳・高橋裕子、一九八九年、なお、近年、シュジウム図書、二〇〇五年、からも刊行されている。原著英語版 pbk, WOODFORD, *Looking at Pictures*, 1983, Cambridge U.P.）。

高階秀爾『名画を見る目』（岩波新書、正統二冊、一九六九、七一年）。ルネサンス以降、二十世紀までの各時代の代表的な絵画を選んで説明した、たいへん明快な入門書である。

### 第一章 美術史を学ぶ楽しみ・・・「作品記述」と「比較」

#### 作品の比較

ペヒト『美術への洞察、美術史研究の実践のために』（岩波書店、邦訳・前川誠郎、越宏一、一九八二）のなかの、一〇七―一二五頁『比較の役割』を参照のこと（原著独語初版 PACHT, 1977, 英語版 pbk には *The Practice of Art History*, H. Miller, 1999）。

森村泰昌『美術の解剖学講義』（ちくま学芸文庫、二〇〇一年、初出。一九九六年）。英語版 pbk には、BARNETT, « Writing a Comparison », *A Short Guide to Writing about Art*, Collins, 1993.

#### 受胎告知

平易な入門編としては  
高階秀爾「受胎告知・・・フラ・アンジェリコ」『ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」はなぜ傑作か？ 聖書の物語と美術』（二〇一四年、小学館101ビジュアル新書）この主題にしぼった研究書としては、  
矢代幸雄『受胎告知』（新潮社、（一九二七）一九七三年）、また、  
高階秀爾、生田圓『受胎告知』（鹿島出版会、一九七七年。多くの、鮮明な色彩図版を含むおおよそ一三〇点前後の図版を掲載。各作品がカタログとされており、文献目録がつく）。

《フラ・アンジェリコ》の作品については、  
岡田温司「受胎告知」（全集・『名画への旅』第五巻、一九九三年、九六一―一五頁）。  
同『処女懐胎』（中公新書、二〇〇七年）。

岡田温司・池上英洋『レオナルド・ダ・ヴィンチと受胎告知』（平凡社ライブラリー、二〇〇七年）。

西洋美術史を広く見た研究としては、  
一瀬あゆみ「グレゴリオ・ロペス帰属《受胎告知》について・・・ポルトガル十六―十七世紀における受胎告知画の図像伝統から」（『日本大学大学院芸術学研究科博士前期課程・修士・論文作品集制作概要集』二〇〇四、一〇七―一四三頁）。

森田義之・岡田温司、他、「レオナルド・ダ・ヴィンチ《受胎告知》を読み解く」『芸術新潮』(二〇〇七年、6月、二十一―九十頁)。  
永澤峻「中期ビザンティン時代の《受胎告知》図イコンの再検討：説話図像から」神の顕現(テオファネイア)「図像への変貌の過程を追って(1)」『表現学部紀要(和光大学)』(二〇〇七年、八月、八三―一〇九頁)。  
同「コムネノス朝ルネサンス絵画の一面面：シナイ山《受胎告知》図イコン中の告知する天使像を手がかりとして」『美術史研究』(二〇〇八年、四六、一一五―一三六頁)。

洋書雑誌文献としては、

VAN DIJK, « The Angelic Salutation in Early Byzantine and Medieval Annunciation Imagery », *BM誌*, 1999.

#### マルティニー

ヴァン・マール、「シモーネ・マルティニー」(鹿島研究所出版会、訳編・鹿島卯女、一九六四「VANMARLE」)。

大原まり子「シモーネ・マルティニー二作〈受胎告知〉と都市国家シエナに関する一考察」(『美術史研究(早稲田大学)』一九九八年、三六号、一一二―一三八頁)。

#### フラ・アンジェリコ

ディディ・ユベルマン『フラ・アンジェリコ』(寺田・平岡訳、平凡社、仏語原著初版「DIDI-HUBERMAN, 1990」)

#### グレコ

吉川逸治「グレコの「聖告」について」、『美術研究』(一九四九年、第三号、三三―四三頁)。

松井美智子「エル・グレコ晩年の受胎告知図について」『美術史学』(一九八三年、第五号、二五―四八頁)。

雪山行二、展覧会『エル・グレコ展』(一九八六年、国立西洋美術館、カタログ、作品番号二七、色彩図版、一九六―一九七頁)。

藤岡博昭『夢かける・大原美術館の奇跡』(山陽新聞社編・発行、一九九一年)。  
孝岡睦子「日本とエル・グレコ」(『エル・グレコ展』展覧会カタログ、二〇一三年、

東京都美術館、一五―二〇頁、付欧文)。

## 第二章 画家伝から見た絵画

### 美術批評史全般

ヴェントウーリ『美術批評史』（みずず書房、一九七一年、邦訳・辻、原著 一九四八年）がある。ヴァザリーについては、一〇四―一〇九頁、ペローリについては、一一八―一二二頁。

画家伝全般の文献紹介としては、

西野嘉章『西洋美術書誌考』（二〇〇九年、東京大学出版会）。

『西洋美術研究』（二〇〇七年、十三号、芸術家伝説特集号）には、「文献リストと解題」（阿部成樹（編）、一六一―二二八頁）があり、基礎的な情報が多く掲載されている。

個別研究としては、

同号にヴァザリー（伊藤拓真）、マルヴァシア（高橋健一）、ファン・マンデル（深谷訓子）の論考がある。

### ルネサンスから十七世紀にかけての全般的な画家伝

十七世紀中葉以降の画家伝、批評史についての英語版 pbk の抄訳集としては、  
HARRISON, WOOD, *Art in Theory, 1648-1815*, Blackwell, 1992.

英語版 pbk としては、

*Artists on Art*, J. M. Urry, (1945) 1976, ed. GOLDWATER and TREVENS. 十七世紀では、カラッチ、ベルニーニ、パチェコ、ルーベンス、プッサン、ル・ブランなどについての、画家自身の手紙・美術論の英訳がある。

一次資料を広く集めた英語版資料としては、

HOLT, *A Documentary History of Art*, Princeton, pbk. 1981 (1947), がある（ファン・マンデル、や、ザンシラルトなどを含む）。

GOLDWATER, TREVENS, *Artists on Art*, Murray, 1976, ( p. 122-162) には、十七世紀の画家に多くの頁が割かれている。

HARRISON, WOOD and GAIGER (ed.), *Art in Theory 1648-1815, An Anthology of Changing Ideas*, 2002, pbk. (p. 18-289) は、多くの資料紹介がある、近年最大の労作。

### ヴァザリーの画家伝

邦訳としては

『ルネサンス画人伝』（白水社、一九八二年、邦訳・田中英道、森雅彦）。『続ルネサンス画人伝』（同、一九九五年、邦訳、平川祐弘他）。

『ジョルジョ・ヴァザリー、フィレンツェの画家、彫刻家、建築家ジョットの伝記』『ジョットの藝術』（中央公論美術出版、一九八八年、邦訳と脚注、三五九―三八一頁、佐々木英也）。

『美術家列伝』（中央公論美術出版、二〇一四年）、邦訳と脚註、森田義之、越川倫明、他）  
また、語学文庫であるが、大学書林の、「美術家列伝」I、II、に亀崎勝訳注の次の図書がある。『ジォット、ブルネッレスキ』一九八九年。『ドナテッロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ』一九九八年。

原典としては、  
一五六八年刊行の伊語版 (IDC) だが、簡単な英訳 (pbk) としては、ペンギン古典双書 (VASARI, *Lives of the Artists*, 1971)。  
または、ほぼ同じタイトルのものが、オックスフォード世界古典叢書 (VASARI, 1991, pbk.) にある。また、この章における引用は、ミラネージ版 (ed. Milanesi, 1879) も参照した。

なお『ルネサンス彫刻家建築家列伝』（白水社、一九八九年、監訳・森田義之）も参考になる。

関連論考として、

ヴァザリ自身については、高階秀爾「ヴァザリの歴史観」『西欧芸術の精神』青土社、一九七九年、一六〇―二六頁、一九七四年初出）。

『ヴァザリの芸術論』（平凡社、一九八〇年）には、高階秀爾、若桑みどり、辻茂、佐々木英也、生田圓各氏の労作がある。また、

ヴァザリと進歩の概念については、

ゴンブリッチ『芸術と進歩』（中央公論美術出版、一九九一年、邦訳・浦上雅司、後藤新治、下村耕史、原著、GOMBRICH, 1978）。

マイナー『美術史の歴史』（ブリュッケ、二〇〇三年、保井他訳、第二部、英語版原著初版、MINOR, 1994）。

ル・モレ『ジョルジョ』（白水社、二〇〇三年、邦訳・平川、白水社、第三、四部、仏語原著 pbk, LE MOLLE, 1995）。

伊藤拓真「ヴァザリの歴史記述の内と外」・「美術家列伝」の地理的構成」『西洋美術史研究』二〇〇七年、十三、十八〜四三頁）。

ヴァザリによる作品記述については、

秋山聰「テキストのなかのイメージ、あるいはエクフランスをめぐる文献研究」〔含関連文献解題〕『西洋美術研究』一九九九年、一、一六四―一七六頁）。

スペイン画家への影響については、

リエーリョ RIELLO「奇人」(「サロ」)エル・グレコ・・・ウイトルウィウスとヴァザリへの注釈見るその実像」(『エル・グレコ展』カタログ、二〇一三年、東京都美術館、一八九〜一九七頁、付欧文)。

より一般的には、MCCOMB, 《Vasari》FW4, 1967 (1958). KLIEMANN, 《Vasari》, DA, 1996.

## ベローリの画家伝

原典としては、  
伊語版（原著初版 BELLORI, *Le vite*, 1672）では、より信頼のおけるものとして  
は、1967 Einaudi, ed. Borea 版がある。画家伝の英訳は、Cambridge UP., 2005,  
trans. by WOHL ; notes by Wohl.

邦訳としては、  
全訳はまだ刊行されていないが、部分的な邦訳が試みられている。

浦上雅司「ジョヴァンニ・ピエトロ・ベッローリ著「ドメニキーン伝」翻訳と解説」  
『福岡大学研究部論集・人文科学編』二〇〇三年、二二（六）、六五―一一五頁）。

論考としては、

ベッチマン「ジョヴァン・ピエトロ・ベッローリの絵画記述」『西洋美術研究』一  
号、八二―一〇〇頁、邦訳・平川佳世（独版原著、BATSCHMANN, 1995）。

浦上雅司「ドメニキーンノ「剽切」事件を巡る考察・・・十七世紀ローマ絵画理論  
史の観点から」『美の司祭と巫女』二〇〇二年、中央公論美術出版、一六三―一七  
九頁）。

森雅彦「G.P.ベッローリの古典主義・・・古典主義美術の『光と影』、あるいは  
『ブッサン伝』の挿絵をめぐって」（田中英道（研究代表者）『「古典主義」美術の  
理論的研究』平成一四―一五年度科研補助金基盤研究③（②）研究報告書、二〇〇四  
年、九七―一九頁）。

《イデア論》だけは、

「画家・彫刻家・建築家のイデア・・・自然より優れた自然美の選択」『イデア』（パ  
ノフスキー、平凡社ライブラリー、二〇〇四年、邦訳・伊藤博明、富松保文、二〇  
〇―二二〇頁）に邦訳がある（原著の独語初版は、PANOFISKY, 1924）。

英訳としては、

英語伊語訳 pbk は、*Idea, A Concept in Art Theory*, 968, Harper & Row/ Coll. Icon,  
tr. by PEAKE (J.P.S.), p154-177。英訳 pbk ヲリザ ENGASS ヲ BROWN による抄訳  
集がある。*Italy and Spain, 1600-1750*, Prentice-H. 1970)。ホッケ《イデアと  
魔術的自然》『迷宮としての世界』美術出版社、一九六六年、邦訳・種村季弘、  
矢川澄子、六七―八二頁、独語版原著 HOCKE, 1957) も参照のこと。

《十七世紀イタリアにおける絵画論のあり方》に関する論考としては、

岡田温司「△真実▽と△真実らしいこと▽」（『芸術と理論の歴史』、京都大学美学美術  
史学研究会編、思文閣出版、一九九〇年、四一七―四二六頁）。

同「ディレッタントの形成、試論・・・ジュリオ・マンチーニを手掛かりに・・・」  
『美学』、一九九三年、一七四号、一二―二三頁）、

同『ディレッタントの登場』（もうひとつのルネサンス）（人文書院、一九九四年、  
第五章）。



高橋健一「第三の場―17世紀イタリアにおける美術展覧会(展示)についての覚え書き」『西洋美術研究』二〇〇四年、一〇、一二二―一二九頁。

英語論文では、GOLDSTEIN, AB 誌 1991, にも詳しい。

## その他の、画家伝

### 《イタリア》

バリオーネについては、

浦上雅司「ジョヴァンニ・バリオーネ著(ドメニコ・ザンピエリ伝)…翻訳と解説」『福岡大学人文論叢』二〇〇三年、三五卷三号、一二五九―一二九〇頁。

アグツキについては、

浦上雅司「近世イタリアにおける絵画叙述とアグツキ」『福岡大学人文論叢』二〇〇五、三七卷(三号)、八一―八四頁。

マルヴァジアについては、

高橋健一「小説のように見えるが、すべて真実であるだろう…カルロ・チェザーレ・マルヴァジアの美術史記述についての覚え書き」『西洋美術研究』二〇〇七年、十三、四四―七二頁。

マリノーについては、

浦上雅司「ジョヴァンニ・バッティスタ・マリノーの詩的模倣論と17世紀ローマ絵画論」『福岡大学人文論叢』二〇一七、四八、九七五―一〇二五頁。

日塔理恵子「ジャンバッティスタ・マリノーの『ガレリア』と蒐集―理想と現実のギャラリー」『ディアファネース―芸術と思想』二〇一四、第一号、一一七―一四六頁。

日塔理恵子「ジャンバッティスタ・マリノー『ガレリア』にみられる capriccio」『日伊文化研究』二〇一四、五二号、九二―一〇七頁。

マンチーニについては、

浦上雅司「ジュリオ・マンチーニ著『絵画省察(Considerazioni sulla Pittura)』の特質と17世紀初頭ローマ美術界における位置」『福岡大学人文論叢』二〇一六、四八、一―三五頁。

バルトロツツイ、バルディヌツツイについては、

坂本篤史「ヤコポ・ヴィニャーリについて…その批評を中心に…」『美術史論集(神戸大学美術史研究会)』二〇一三年、一三三号、一〇二―一二六号。

カラヴァッジオに関するイタリア十七世紀の画家伝については、

石鍋真澄・三好徹『カラヴァッジョの伝記資料』『成城短期大学紀要』(一九八六年、十七号、二七―六四頁)  
石鍋真澄・編訳『カラヴァッジョ伝記集』(二〇一六、平凡社、平凡社ライブラリー・八三八)

英語版 pbk としては

FRIERDLAENDER, *Caravaggio Studies*, Schocken, (1955) 1972.

《フランス》

フェリビアンの原典については、

「原典資料紹介 アンドレ・フェリビアン・王立絵画彫刻アカデミー講演録序」(上)『美学美術史研究論集』一九八九年、十七・十八、一〇五―一五頁、邦訳・栗田秀法・木俣元一・小林久見子、他訳・

「原典資料紹介 アンドレ・フェリビアン」王立絵画彫刻アカデミー講演録序」(下)『美学美術史研究論集』二〇〇一、十九、八三―一〇一頁、邦訳・栗田秀法・木俣元一、他)

関連論文としては、

フェリビアンの理論については、

杉山喜多子「ニコラ・プッサンの風景表現―アンドレ・フェリビアンの著作より」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』一九八四年、三八、三一―五一頁。

島本浣「ロジェ・ド・ピルと一八世紀の美術批評」『美学』一九八七年、一四九号、一三一―二五頁)のなかに若干の紹介がある。

島本浣「ルネ・デモリス編・注釈『フェリビアン―古今の卓越した画家の生涯と作品についての対話』」『美学』一九九一年、四一・四、七四頁)

エニック(N)『『芸術家の誕生・・・フランス古典主義時代の画家と社会』(二〇一〇、岩波書店、邦訳・佐野泰雄(仏語原著 1993, HEINICH, pbk)。

島本浣「フランス古典主義時代の絵画思想・・・アカデミーを中心にして」『芸術の線分たち』昭和堂、一九九八年、三八―六四頁)

大野芳材「1667年の「コンフェランス」…宗教画事始」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』二〇〇四年、十二、一二九―一四六頁)。

拙論「アンドレ・フェリビアン著「フィリップ・ド・シャンパーニュ伝」・・・一六二〇―四〇年代における宗教画制作」『フランス近代』10章、初出、二〇一〇年)。

秋元優季「アンドレ・フェリビアン の生涯と業績」『日本大学デジタルミュージア』  
2013-9

[http://galeriecont.cin.nihon-u.ac.jp/dat/2013-9-19\\_AKIMOTO\\_FELIBIEN.pdf](http://galeriecont.cin.nihon-u.ac.jp/dat/2013-9-19_AKIMOTO_FELIBIEN.pdf)  
(2018.5.4)

栗田秀法「ベラスケスとフランス、そしてプッサン・・・「高貴なる技芸」をめぐって」『ベラスケスとバロック絵画』四一〜五一頁)

アカデミーについては

大野芳材+「王立絵画アカデミーの功罪」『美術と都市』ありな書房、二〇一四年、  
二一一―二一九、二三七―二三八頁)。

#### 《オランダ》

カーレル・ファン・マンデルの原典については、

カーレル・ファン・マンデル『北方画家列伝』注解』(尾崎彰宏・幸福輝・  
廣川暁生・深谷訓子、編訳、二〇一四、中央公論美術出版)

ハウブラーケンと、ドイツ人のザンドラルトが書いた画家伝については、

尾崎彰宏『レンブラント工房』(講談社選書メチエ、一九九五年、第一章)。

アンゲル他については、

高橋達史「回転する車輪の表現をめぐって・・・フィリップス・アンゲル《絵画芸術  
礼讃》と十七世紀オランダ絵画」『美術史』(一九八二年、一一二号、七六―九四  
頁)。

同「フィリップス・アンゲル?《絵画芸術礼賛》と一七世紀前半のオランダの物語  
画」『日蘭学会会誌』一九八二年、十三号、六三―一三三頁)。

同「選り抜きの自然さ・・・クニッベルヘン、ファン・ホーイエン、ポルセリスの  
《早描き競技》逸話をめぐって」『美術史論叢』一九八四年、一号、三六―六四頁)。

個別研究では、

千速敏男「一七世紀オランダの美術理論についての一考察・・・schilderachtich  
について」『美学』一九九二年、一六八号、四六―五六頁)。

#### 《イギリス》

十六世紀末ではあるが、

ヒリアード『リムニング芸術論』(昭和六三年、平成元年、二年度科研補助金研究  
報告書、邦訳と解題、一九九一年、潮江宏三)。

#### 《スペイン》

パチエコについては、近年、邦訳が試みられている。

「フランシスコ・パチエーコ《絵画論》(翻訳)」「《スペイン・ラテンアメリカ美術史研究》二〇〇〇―二〇〇四年、一〇五号、邦訳・松原、貫井、楠根、大坪、松田、太田、浅野、鳥居、金沢、川瀬。久々湊、諸星、岸、木下、松井、久米、安發、門田、浅若、藪部)。

大高保二郎「パチエーコの《絵画論》解題」(同誌、二〇〇〇年、一号、二一―二三頁)。

ウーガス(B・パセゴダ・イ)「パチエーコの《絵画論》解題」(抄訳)(同誌、二〇〇一年、二号、二二―二八頁)。

《ドイツ》

安井雄一郎「ザントラルトとグリユーネヴァルト・・・バロック期に生まれた一伝説」(『デアアルテ』(西日本文化協会)、一九九六年、十三号、十七―四二頁)

エック(C)「グリユーネヴァルトとユイスマンス・・・再発見と神話のはざままで」(『西洋美術研究』二〇一三年、十七号、一六八―一七四頁、邦訳・吉田映子)

大杉千尋「ザントラルトによるグリユーネヴァルト伝(本伝及び補遺)」(『美術史論集』二〇一六、十六号、一一九―一三〇頁)

### 画家とその制作環境についての研究(参考)

川上恵理「神聖ローマ帝国ルドルフ二世の一五九五年の勅書による周辺国ギルへの影響・・・ハンブルクの画家ギルドからプラハの画家ギルドに宛てた書簡より」(『美術史論集』二〇一七、十七号、1―7頁)

同「同時代資料からみるルドルフ二世のクンストアマー・・・ハンス・ウルリヒ・クラフトの回想録より」(『美術史論集』二〇一八、十八号、一七七―一八三頁)

### 第三章 情念表現から見た絵画

#### 初期資料

アルベルテイーの絵画論については、『絵画論』(中央公論美術出版、邦訳、三輪福松、一九七一年、特に『第二巻』。英訳版 pbk だけは、ALBERTI, *On Painting*, Yale Pap. : Spencer, 1966)。

レオナルドの絵画論については、『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』(岩波文庫、邦訳、杉浦明平、一九五四年、二巻、特に上巻の『運動と表情』)。英語版 pbk だけは、*The Notebooks of Leonardo Da Vinci*, 2 vols., 1970, ed. by RICHTER, Dover.

#### 概論的な論考

基礎文献としては、  
リー「詩は絵のごとく・・・人文主義絵画論」『絵画と文学』(一九八四年、中森義宗編、中央大学出版部、邦訳・森田義之、篠塚二三男、二一九―二三〇頁。難解な論考ではあるが、この論文は、十七世紀美術論を考える時の基礎資料である。  
原著英語論文は、LEE, *AB* 誌、1940.

物語画との関連については、  
バクサンドール「物語画(イストリア)、身体とその言語」(『ルネサンス絵画の社会史』平凡社、一九八九年、八六―一二六頁、  
英語版 pbk の原著、BAXANDALL, *Painting and Experience in Fifteenth Century in Italy*, Oxford Pap., (1972) 1989.

#### 個別研究

プッサンの絵画論については、  
近藤昭『ニコラ・プッサンの書簡集について』(『芸術学論叢』六号、一九八四年、一五―二二頁)。

《マナの収集》については、  
拙論「ダヴィッド作「テニス・コートの誓い」と群像構成理論」『思想』(一九八九年七月、九六―一二八頁)。

栗田秀法「マナの収集」(全集『名画への旅』第一二巻、一九九四年、七二―九五頁)。

同「ニコラ・プッサン作《マナの収集》・・・織り込まれた新ストア派的範例」(『プッサンにおける語りと寓意』三三社、二〇一四年、二―三、初出一九九四年)。

拙論「革命期前後のカリカチュアについてのノート・誇張表現とその歴史・・・フランス革命二〇〇周年」『學鏡』(一九八八年、一二月、四六一―五一頁)。

十七世紀イタリアでの情念表現や、デコールム理論については、浦上雅司「サッキとコルトーナの論争に関する一省察・・・その評価を巡って」(『美術史の六つの断面』美術出版社、一九九二年、二〇〇―二二三頁)。

十八世紀フランスにおけるこの理論の展開については、デイドロ『絵画について』(岩波文庫、佐々木健一訳、二〇〇五年、第四章、一七六―一七七年)。

伊藤巳令「グルーズ作『小鳥の死を嘆く少女』にみる、叙述、の手法の考察」『美術史』(一九九一年、一二〇号、一六六―一八二頁)。

英語版 *pbk* としては、BRYSON, *Word and Image*, Cambridge U.P., 1981.

《動物類推理論》については、

バルトルシャイティス「動物感相学」(『アベラシオン』同著作集1、一九九一年、邦訳・種村季弘、一―一八頁。原著初版、BALTRUSAITIS, 1957)。

ゴンブリッチ「カリカチュアの実験」(『芸術と幻影』岩崎美術社、一九七九年、邦訳、瀬戸慶久、四四四―四八〇頁、英語版は、GOMBRICH, *Art and Illusion*, Phaidon, 1959; *pbk*, 1977)。

ゴンブリッチ「仮面と顔」(『イメージと目』玉川大学出版部、一九九一年、邦訳、白石和也、九五―一二二、二九五―二九六頁、英語版原著、GOMBRICH, 1982)。

高階秀爾「人相学・四性論と動物類推」『ルネッサンス夜話、近代の黎明に生きた人々』(河出文庫一九八七年、初出・一九六〇年)。

高山宏「<神の筆跡>としての顔・・・ラファター『観相学入門』」『ユリイカ』(一九八三年六月号)。

同「観相学の流行」『近代文化史入門』(二〇〇七年、講談社学術文庫、二二二―二二六頁)。

関連した英語版百科事典のなかの項目としては、BIALOSTOCKI, 《Characterization》, *EN4*, 1960(1958) (図版三五点)。

《デカルト》については、

情念論『デカルト』(叢書、世界の名著、二二六、一九六七年、邦訳、野田又夫。特に、六九、七三―七四、一一三の各節)。

#### 第四章 時代考証から見た絵画

《デコールムの概念》については、  
リー『詩は絵のことく・・・』(前掲書、一九四―二六二頁)。JOYCE, 《Gasping at Shadows》, AB誌, 1992.

《ルーベンスにおける引用》については、  
高橋裕子「ルーベンスの芸術における借用と創造」『美術史』(一九八七年、一二二、  
八五―九八頁)。  
中村俊春「ルーベンス作《キリストの笞打ち》をめぐって」『美術史』(一九八八年、  
一二四、一〇九―一二二頁)。

《プッサンにおける引用》の問題については、  
フリードレンダー『プッサン』(美術出版社、一九七〇年、十七―二十四頁、仏語  
版 FRIEDLAENDER, 1965)。  
拙著『プッサン』(一九八四年、全集、カンヴァス世界の大画家、第十四巻、付録  
「参照」)。  
望月『プッサン』  
木村『イエズス会』(論文5)  
《シャンパーニュにおける引用》については  
木村『フランス近代』(5, 8, 9章)  
DEMPSEY, « Poussin and Egypte », AB誌, 1993.

《サビニの女たち》については、  
浦上雅司「サビニの女たちの略奪」(全集・『名画への旅』第十一巻、一九九三年、  
九六―一四頁)。

## 第五章 様式から見た絵画

### 様式論一般

佐々木健一「様式」『美学辞典』一九九五年、東京大学出版局、一二八一―一三八頁。

ゲーテの論考は、

「様式について」『ゲーテの芸術論』原著初版、一七八九年、邦訳・新田靖一、一九八三年、早稲田大学出版部、一―九頁。

リーゲルの著作は、

『美術様式論』(岩崎美術社、一九七〇年、邦訳・長広敏雄、独語版原著、RIEGL, 1893)。

フォシヨンの著作は、

『私たちの生命』(ちくま学芸文庫、二〇〇四年、邦訳・阿部成樹、仏語版原著、FOCILLON, 1934)。

バルトルシャイティスの著作は、

『異形のロマネスク』(講談社、二〇〇九年、邦訳・馬杉宗夫、仏語原著、BALTRUS (注意)AITIS, 1931, 1986) 対象は中世彫刻であるが、より平易で、生態学的類型論の方法も取り入れている。

ヴェルフリンには限らず、リーゲル、ゴンブリッチ、シャピロなどの学者の様式論の紹介としては、

細井雄介「様式論の生命力」『芸術の理論』講座・二〇世紀の芸術、一九九〇年、七三―一〇八頁。

斉藤稔「様式問題の芸術学的視座」『藝術研究』広島芸術学研究会、一九九二年、第4号、四三―六〇頁。

様式論などを含む、ドイツ系美術史の学説については、

英語版 pbk の SCHIFF (ed.), *German Essays on Art History*, Continuum, 1988.

近世美学史のなかで位置については、

PODRO, *The Critical Historians of Art*, Yale U.P., 1982.

様式の心理学については、

ゴンブリッチ「様式の心理学」『装飾芸術論』一九八九年岩崎美術社、邦訳、白石和也、三五四―三九五頁。

英語版 pbk である GOMBRICH, 《The Psychology of Styles》, *The Sense of Order*, Phaidon, 1979.

### バロック概念一般



フリードレンダー『マニエリスムとバロックの成立』（岩崎美術社、一九七三年、邦訳・斉藤稔、一九七三、原著 FRIEDLAENDER, 1925-26、英語版 pbk では *Mannerism & Anti-Mannerism in Italian Painting*, Schocken, 1965  
ドルス『バロック論』（築摩叢書、一九六九年、邦訳・成瀬駒夫、また、美術出版社、一九七〇、邦訳・神吉敬三、仏語版原著、D. ORS, 1935、  
高階秀爾「ドルス・バロック論」『美の思索家たち』一九八三年、青土社、三四九―三六八頁、には様式論ではない、文化概念としてのバロックについての優れた解説がある）。

ブラーツ「バロック序説」(『官能の庭』ありな書房、一九九二年、邦訳、森田義之、二一三〜二三五、六三七〜六四〇頁、伊語原著、PRAZ, 1953, 1956)。  
ルーセ『フランス・バロック期の文学』（筑摩書房、一九七〇年、邦訳・伊東廣太他、仏語版原著、ROUSSET, 1954)。

バロック研究史を整理したものは、  
タピエ『バロック芸術』文庫クセジュ、一九六二、邦訳・坂本満、高階秀爾、仏語原著、TAPIE, 1961)。

ボヌフォワ『バロックの幻惑・一六三〇年のローマ』（国書刊行会、一九八九年、邦訳・島崎ひとみ・阿部良雄（監）、仏語原著、BONNEFOY, 1970)。

谷川渥「バロック論ノート」(『バロックの本箱』北宋社、一九九一年、二四九〜二六六頁、初出一九八〇年)。

ボーサン『ヴェルサイユの詩学……バロックとは何か』（平凡社、一九八六年、仏語版原著、BEAUSSANT, 1981)。

藤井康生「バロックの系譜」(同書、一九八六年、一六三―二二〇頁)。

浦上雅司「ピエトロ・ダ・コルトーナの初期の活動について」(『美術史論叢』一九八五年、二号、七五―九〇頁)。

高階秀爾『バロックの光と闇』（小学館、二〇〇一年、一章。「バロック」という言葉の語源について、パノフキーの見解を紹介）。

### 様式概念としてのバロック

《ヴェルプリンの著作の邦訳・英訳》としては、  
ヴェルプリン『美術史の基礎概念……近世美術における様式発展の問題』（二〇〇〇年、慶應義塾大学出版会、邦訳・海津忠雄）。原著独語初版は、一九一五年。

英訳 pbk もある『*Fundamental Principles of Art History*, Dover, 1950°  
英語版 pbk である』 KLEINBAUER, *Modern Perspectives in Western Art History*,  
Holt, R. and W., 1971, の中にも紹介がある。 LANG, 《Style》, EA, 1998.

「ヴェルフリンの講演要旨〈造形芸術にける様式の問題〉およびパノフスキの  
慶祝記事〈ハインリヒ・ヴェルフリン〉」『聖心女子大学論叢』一九八九年、七三  
集、一三七―一六二頁、邦訳・細井雄介）。

《古典主義》を考えるには、

ヴェルフリン『古典美術』（美術出版社、邦訳・守屋謙二、一九六二年、特にレオ  
ナルドの《晚餐》については、四三―四八頁参照。原著独語初版は一八九九年。  
英訳 pbk には『*Classic Art*, Phaidon, 1980）。

美術史における古典主義の、美学的概念、様式概念、時代概念について平易にまと  
めてある記述としては、

高階秀爾「古典主義（美術）」『世界大百科事典』（平凡社、二〇〇七年）。

《ヴェルフリンの学説》を紹介した論考としては、

ウッドフォード「様式分析入門」『絵画の見方』（前掲書、十一章、八四―九三頁）、

神林恒道「様式史としての美術史」、『芸術学ハンドブック』（勁草書房、一九八九  
年、二二―二七頁）。

久保光志「バロック論の根底にあるもの・ヴェルフリンの方法論をめぐって」『跡  
見学園女子大学美学美術史学科報』一九八二年、一〇号、一―十六頁）。

海津忠雄「美術史における対象の概念……ブルクハルトとヴェルフリン」『哲学』、  
一九八九年、八八集、一三三―一六三頁）。

マイナー『美術史の歴史』（ブリュッケ、二〇〇三年、保井他訳、第三部、英語版  
原著初版、MINOR, 1994）。

## アトリビューション

初学者には、

高橋裕子「アトリビューション」『西洋美術のことは案内』（第一部参照）。

個別研究では、

ラ・トゥールの作品については、

マーク・ロスキル「絵画の帰属」「忘れられていた画家の再発見」『美術史とは何  
か』一九八七年、日貿出版社、十五―三八、一六一―一八二頁）。（英語版原著、pbk:  
ROSKILL, *What is Art History?*, 1976, ch, 1, 6）。

本質的な議論は、

FRIEDLAENDER, 《Artistic Quality: Original and Copy》, *BM*誌, 1941.

フリートレンダー「作者決定の客観的根拠」『芸術と芸術批評』（岩崎美術社、千足伸行訳、一九六八年、美術名著選書9、一四二―一四九頁、独語版原著1946）。

参考図書による文献案内は、DURO, 1992（同邦訳）（十六章参照）、モレリについては、*DA*。

我が国における研究例としては、

田中英道『支倉常長・・・武士、ローマを行進す』（二〇〇七年、ミネルヴァ書房）。

森洋子「失われたブリュッゲル（？）の《イカロスの墜落》」（『ブリュッゲルに魅せられて』二〇〇八、一〇三―一三五頁）。

木村『イエズス会』論文九第五節。

## 第六章 画像学から見た絵画（1）

画像学を学ぶ楽しさを知るための資料

高階秀爾・小松左京『絵の言葉』（初出一九七五年、講談社学術文庫、一九七六年、青土社、二〇〇五年）。

山口昌男『本の神話学』（中公文庫、一九七七年）。

高階秀爾『歴史の中の女達』（岩波現代文庫、二〇〇八年、初出一九七八年）。

若桑みどり『絵画を読む（イコノロジー入門）』（NHKブックス、一九九三年、初出一九九二年）。

同『イメージを読む・・・美術史入門』（ちくま学芸文庫、二〇〇五年、初出、一九九三年）。

岡田温司『「聖書」と「神話」の象徴図鑑』（ナツメ社、二〇一一年）

文庫・新書を中心にした平易な資料

《キリスト教主題》

平易な入門書としては、

阿刀田高『旧約聖書を知っていますか』（新潮文庫、一九九四年）。

高階秀爾『ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」はなぜ傑作か？ 聖書の物語と美術』（高階秀爾、二〇一四年、小学館101ビジュアル新書）

秦剛平『美術で読み解く旧約聖書の真実』（ちくま学芸文庫、二〇〇九年）、

同『美術で読み解く新約聖書の真実』（同前、二〇〇九年）、

同『美術で読み解く聖人伝説』（同前、二〇一二年）

同『絵解きでわかる聖書の世界―旧約外典偽典を読む』（青土社、二〇〇九年）

同『美術で読み解く聖母マリアとキリスト教伝説』（ちくま学芸文庫、二〇〇九年）。

山室静『聖書物語』（現代教養文庫、一九六三年）。

図版を多く採録したものとしては、

諸川春樹・利倉隆『聖母マリアの美術』（美術出版社、一九九八年）。

澤柳大五郎（監修）『聖母マリア』（一九五四年、岩波写真文庫、復刻ワイド版、一九九〇年、九二）。

同『キリスト』（一九五八、岩波写真文庫、二八二、復刻ワイド版、一九九〇年、九三）。

個別の聖女図像論としては、

植田重雄『聖母マリア』（岩波新書、一九八七年）。

馬杉宗夫『黒い聖母と悪魔の謎』（講談社学術文庫、二〇〇七年、講談社現代新書、一九九八年）。

岡田温司『マグダラのマリア』（中公新書、二〇〇五年）

### 文学上の典拠についての資料

《キリスト教主題の典拠》

『聖書（新共同訳・旧約聖書続編つき）』（共同訳聖書実行委員会「編」、日本聖書協会、一九九八年）。

文庫では、『新約聖書…共同訳・全注』（講談社学術文庫、堀田雄康「注・解説」一九八一年）。

『聖書（新共同訳）スタデイ版』（改訂版、日本聖書協会、二〇一四年）。

ド・ウオラギネ『黄金伝説』（平凡社ライブラリー、二〇〇六年、四卷、邦訳・前田敬作・今村孝・山口裕・西井武・山中知子、他に、人文書院版、一九七九―七七）。

『聖書外典偽典』（教文館、一九七五―八二年、全九巻）。』

アポクリファ・・・旧約聖書外典』（一九六八年、改訂版、聖公会出版）。

《ギリシャ・ローマ神話主題の典拠》

平易な入門書としては、

阿刀田高『ギリシャ神話を知っていますか』（新潮文庫、一九八四、初出、一九八一年）。

高階秀爾『ミロのヴィーナスはなぜ傑作か？ギリシャ・ローマの神話と美術』（二〇一四年、小学館101ビジュアル新書）

阿刀田高『私のギリシャ神話』（集英社文庫、二〇〇二年、初出、一九九九年）、

山室静『ギリシヤ神話・付北欧』（現代教養文庫、一九六三年）。

典拠については、

オウイデイウス『変身物語』（岩波文庫、一九八一〜八四年、邦訳・中村善也）。

同『恋愛指南』（岩波文庫、二〇〇八年、邦訳・沓掛良彦訳）。

ヘシオドス『神統記』（岩波文庫、邦訳・廣川洋一、一九八四年）。

ホメロス『イーリアス』（岩波文庫、一九五三〜五八年、邦訳・呉茂一）。

同『オデュッセイヤ』（岩波文庫、一九七十七年、邦訳・呉茂一）。

アポロドーロス『ギリシヤ神話』（岩波文庫、一九五三年、邦訳・呉茂一）。

ヒュギーヌス『ギリシヤ神話集』（講談社学術文庫、邦訳・松田治・青山輝男、二〇〇五年）は、事典的な性格が強く調べやすい、

入手が容易な、概説書・研究書としては、

呉茂一『ギリシア神話』（新潮文庫、一九七九年）。

佐々木理『ギリシヤ・ローマ神話』（講談社学術文庫、一九九〇年、初出、一九六四年）。

英語版 *pbk* では、CARPENTER, *Art and Myth in Ancient Greece*, 1991. T & H.

《古代史の主題の典拠》

平易な入門書では、

阿刀田高『ローマとギリシヤの英雄たち 栄華篇—プルタークの物語』（新潮文庫、二〇一一年）。

邦訳の原著としては、

プルタルコス『英雄伝』（岩波文庫、邦訳・河野与一、一九五二〜五六年）。

『プルタルコス英雄伝』（ちくま学芸文庫、村川堅太郎編、一九九六年、全三巻、定本、一九六六年）。

リーウィウス『ローマ建国史』（岩波文庫、邦訳・鈴木一州、二〇〇七年、上、刊行継続中）、

リウイウス『ローマ建国以来の歴史』（西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇八年、邦訳・毛利晶。刊行継続中）。

概説書としては、  
モンタネツリ『ローマの歴史』（中公文庫、一九八五年、邦訳、藤沢道郎、初出一九八一―八二年）。

松田治『ローマ神話の発生・・・ロムルスとレムスの物語』（現代教養文庫、一九九二年）。

ド・トリーヌ『物語ローマ誕生神話』（現代教養文庫、一九八〇年、邦訳、大久保敏彦、植田祐次、仏語版原著、DE TAURINES, 1931）。

《典拠に関して、英語版の基礎的なテキストを探す》には、

RIVERS, *Classical and Christian Ideas in English Renaissance Poetry*,  
*Routledge*, 1994 (1979) (英語版 pbk)。

#### アトリビュートについての資料

拙著『名画を読み解くアトリビュート』（淡交社、二〇〇二年、和文・欧文の関連文献は「読書案内」一四二―一五五頁）。

宮下規久朗『モチーフで読む美術史』（二〇一三年、ちくま文庫）

ゴンブリッチ「アトリビュート」『シンボリック・イメージ』平凡社、邦訳・大原まゆみ、一九九一年、二六四―二七〇頁、原著、GOMBRICH, 1972）。

佐々木健一「象徴」『美学辞典』前掲書、一三八―一四七頁）。

#### エンブレムについての資料

《文献案内》としては、

辻茂『東京芸術大学所蔵エンブレム本に関する美術史的研究』（平成二―四年度科  
研報告書、一九九三年、辻、佐藤、望月、吉澤、田中、保井各氏の論考を含む）。  
和書も含み、網羅的なもので、

伊藤博明「マリオ・プラーツとエンブレム研究」（プラーツ『奇想主義研究』、あり  
な書房、一九九八年、解題、五四七―五〇六頁）

同『エンブレム文献資料集』（一九九九年、ありな書房、『綺想主義研究』補遺）。

《美学・美術史系の基礎文献》としては、

プラーツ「エンブレム、インプレーザ、エピグラム、コンチェット」『官能の庭』  
前掲書、邦訳、若桑みどり、伊語原著、PRAZ, 1933）。

プラーツ「エンブレム・インプレーザ・エピグラム・奇想」『奇想主義研究』あり  
な書房、一九九八年、邦訳・伊藤博明、一五―九一頁、伊語原著初版、PRAZ, 1934）。  
アルパース「オランダ絵画のエンブレムの解釈について」『描写の芸術・・十七世  
紀のオランダ絵画』ありな書房、一九九三年、邦訳、幸福輝、三四九―三五六、四

〇六一四〇七頁、原著英語版、ALPERSE, 1983)。

シェーネ『エンブレムとバロック演劇』(ありな書房、二〇〇二年、邦訳・岡部仁・小野真紀子、独語版初版・SCHONE, 1964)

同個別研究としては、

松枝到「エンブレムの考古学―ルネサンス象徴論へのプログラム」『和光大学人文学部紀要』一九八三年、十八、一八一―一九五頁。

桑木野幸司「知の編集空間としての初期近代イタリアの庭園」『地中海学研究』二〇〇九年、三二号、三一―二八頁。

伊藤博明『綺想の表象学……エンブレムへの招待』(二〇〇七年、ありな書房)

同「キリシタン版とエンブレム(1)……平家物語(二五九三年)の題扉をめぐる」『埼玉大学紀要(教養学部)』二〇一一年、四七巻、第一号、一―十五頁。

同「フランチェスコ・コロナ『ヒュペネロトマキア・ポリフィリ』の世界」『世界を読み解く一冊の本』慶応義塾大学出版会、松田隆実・徳永聡子編、二〇一四年、一三三―一八九頁

同「布教とイメージ……ある「図解福音書」(ローマ、1573年刊)について」(『エンブレムの諸相』科学研究費(基盤研究C)「近代英国を中心としたエンブレムにおける聖と俗の表象に関する学際的研究」(2009～2011年)・「近代英国を中心とするエンブレムにおける宗教と科学に関する学際的研究」(2012～2015年)研究成果報告書、研究代表者・植月恵一郎、二〇一五年、七―四二頁)(英文による初出、二〇一四年)

同「キルヒヤーとオベリスク」『19世紀学研究』二〇一五年、九号、三九―七二頁)

《英文学系の個別研究》としては、

ヘルトゲン『英国におけるエンブレムの伝統』(慶應義塾大学出版会、邦訳・川井万里子・松田美作子、二〇〇五年、英語版原著、HOLTGEN, 1986)。

デイリー『英国のエンブレムと物質文化・シエイクスピアと象徴的視覚性』(邦訳・伊藤博明、二〇一〇年、埼玉大学教養学部・リベラル・アーツ叢書3、DALY)。

松田美作子「Margaret Gatty, Parables from Natureとヴィクトリア朝エンブレムの復興 A Lesson of Faith を中心に」『Seijo English Monographs, 2008, no. 40, p. 407-423

同「エンブレム研究の回顧と展望」『成城大学文芸学部紀要』二〇〇九年、九八一―一〇二頁)。



- 同『シェイクスピアとエンブレム』（慶應義塾大学出版会、二〇一二年）。
- 同『ヴェニス商人』における Fortune と fortune の関係・・・ usance と fortune との関係」（既出『エンブレムの諸相』二〇一四年、四三〜六八頁、初出・同年）
- 同「革命後のエンブレム作家たちと宗教文化・・・詩編（歌）137番をめぐって」（『17世紀の革命・革命の17世紀』十七世紀英文学会編、金星堂、二〇一七年、一六一〜一八七頁）
- 植月恵一郎「脚のない鳥ーワーズワスの〈極楽鳥〉を中心にー」（『日本大学芸術学部紀要』二〇一二年、五五号、四七〜六〇頁）。
- 同「蝸牛考ーラヴレイスの小宇宙（マイクロコスム）ー」（同紀要、同年、五六号、四五〜六〇頁）。
- 同『お気に召すまま』鹿狩を」（同紀要、二〇一三年、五八号、六一〜七四頁）。
- 同「ハートのアート/アートのハート：形而上詩を中心に」（『日本大学芸術学部紀要』二〇一七年、六六、一七〜三五頁）
- 山本真司「Your fortune stood upon the caskets there(3.2.201):『ヴェニス商人』における「二つの小箱選び」の文化的背景とエンブレム解釈の新たな可能性」（既出『エンブレムの諸相』二〇一五年、六九〜一一八頁、初出・同年）。
- 出羽尚「トムソンの自由とブリタニアの凶像」（既出『エンブレムの諸相』二〇一五年、一五一〜一七六頁、初出・同年）。
- 基礎的な英語版文献 pbk としては DALY. *Literature in the Light of the Emblem*, University of Toronto Press, (199) 1998

## 第七章 画像学から見た絵画 (2)

### ① 一般的な文献

《チェザーレ・リーパの著作の翻訳》

本格的な邦訳は、

リーパ『イコノロジーア』(ありな書房、二〇一七年、邦訳・伊藤博明)

邦訳を含む文献としては、

水之江有一『図像学事典・リーパとその系譜』(岩崎美術社、一九九一年)。

英訳版(一八世紀版の注釈付きpbk)は、

*Baroque and Rococo Pictorial Imagery*, Dover, intro. by MASER.

《寓意表現についての入門的資料》としては、文庫・新書では

高階秀爾・小松左京『絵の言葉』(前掲書、6章参照)。

ラングシユア『アレゴリー』(ありな書房、二〇一五年、邦訳・伊藤博明・石井朗、LANGMUIR, 1997)

マッソン『寓意の画像学』(文庫クセジュ、一九七七年、邦訳・末松壽、仏語原著、MASSON, 1974)

《擬人像》については、

ウィットカウアー「好機・時・美德」(『アレゴリーとシンボル』(平凡社、一九九一年、一七九―一九八頁。初出 WITTKOWER, *JWI*誌, 1937-38)。

同「忍耐」と「好機」・ある政治的寓意の物語」(同書、一九九―二二二頁。初出、*JWI*誌、1937-38)。

GOMBRICH, 《Personification》, *Classical Influences on European Culture A.D. 500-1500*, Cambridge UP.

高橋裕子「愛のアレゴリー」(『名画』第七巻、一九九二年、九六一―一〇五頁)。

《リーパ》については、

STEFANI, 《C.Ripa》. *JWCI*誌, 1990

MACGRATH, 《Ripa》, *DA*, 1996;

木村「燃える心臓」『イエズス会』(V章―十三、初出、一九九六年)

《イコノロジーの本格的な定義》については、

パノフスキー『イコノロジー研究』(ちくま学芸文庫、二〇〇二年、特に《序論》、

旧版、美術出版社、一九七一年、邦訳・永澤峻他、原著初版、PANOFSKY, 1939. 英語版 pbk としては、*Studies in Iconology*, 1972, Icon)。

『イコノグラフィとイコノロジー』読解』『和光大学人文学部紀要』(一九七八年、十三号、一〇五―一二七頁には、次の基礎的な論文の邦訳と注解がある。BIALOSTOCKI, 《Iconography and Iconology》, *EWJ*, (1958) 1963。また、LEINBAUER(1971, 前掲書)には、PANOFSKY, WEITZMANN, LEHMANN の論考の紹介がある。

ビアウオストツキ「イコノグラフィ」『西洋思想大事典』平凡社、第一巻、七一―七八頁、邦訳・松枝、一九九〇年、原著 BIALOSTOCKI, *Dictionary of the History of Ideas*, 1973)。

近年の大事典項目には新しい情報がある。

DA(1996)の関連項目には、

《Iconographic handbook》；

MCGRATH, HOPE, 《Iconographic programmes》；

LASH, 《Iconography and Iconology》；

美学哲学系では、

ARMSTRONG, 《Iconography and Iconology》, *EA*, 1998, 2005；

HOURLIHANE, 《Iconography》, *New Dictionary of the History of Ideas*, 2005.

《十七世紀絵画の図像(解釈)学的研究》としては、

プッサン研究の場合、パノフスキー「われ、また、アルカディアにありき」(『伝統

と現代』平凡社、一九六九年、邦訳・土岐恒三、三七七―四〇四頁、原著初版、

PANOFSKY, 1936'

また、英語版 pbk である、*Studies in Iconology*, 1972, に改訂版)。

ゴンブリッチ「プッサン《オリオン》の主題」(『シンボリック・イメージ』既出、二四―二四九、四二八―四二九頁、邦訳・遠山公一、英語原著 GOMBRICH, *BM* 誌, 1944)

伊藤博明『ヨーロッパ美術における寓意と表象：チェーザレ・リーパ「イコノロジー」研究』ありな書房、二〇一七年

## ② ジャンル別文献

《ジャンル一般》

マックス・J・フリードレンダー『芸術と芸術批評』(岩崎美術社、一九六八年、邦訳・千足伸行、独語原著、一九四二年)、

大野芳材「フランスの王立絵画アカデミーにおけるジャンルの問題について」(『美

術史論叢』東京大学、一九八九年、五、五七―七四頁）。

英語 pbk として初歩的なものは、

FRIEDLAENDER, *Landscape, Portrait, Still Life*, Schocken, 1963（独語版初版 1947）。

## 宗教学

### 《全般的な研究》

マール『ヨーロッパのキリスト教美術』（岩波文庫、上、下、一九九五年、岩波書店、邦訳・柳宗玄、荒木成子、一九八〇年。仏語版原著、MALE, 1945）。聖人については、同「キリストの聖なる伴侶たち」（みすず書房、一九九一年、邦訳、田辺保、仏語版原著、MALE, 1958）。

### 《宗教図像のための一次資料研究》

パレオッティについては、

高橋健一「ガブリエーレ・パレオッティの『聖俗画像論』のために」（『西洋美術研究』二〇〇九年、十五、一八六―二〇一頁）。

バロニウスについては、

秋元優季「悔悛のマグダラのマリア図像―対抗宗教改革期のキリスト教擁護論の視点から」（『芸術・メディア・コミュニケーション』二〇一一、九、二九・三九頁）。

### 《反宗教改革と美術との関係についての研究》

基礎文献では、

マール「十七世紀美術における死の図像」『エピステーメ』（一九七八年、八月号、邦訳・大久保康明、七八―一〇五頁、仏語原著、MALE, 1932）。

英語版 pbk では、

BLUNT, *Artistic Theory in Italy 1450-1600*, 1940, Oxford U.P. : 邦訳・中森義宗、『イタリアの美術』（鹿島出版会、一九六八、SD選書、第八章）。

個別研究では、

越宏一「美術における日本二六殉教者・その作品カタログ」（『国立西洋美術館年報』一九七三年、第八号、一六―七二頁）。

神吉敬三「トリエント教令とスペイン美術・その関連度をめぐって・・・」（『上智大学外国語学部紀要』一九八二年、十七号、一〇一―一二〇頁）。

同「対抗宗教改革美術としてのスペイン・バロック絵画」『ユリイカ』（一九八四年、三月、十七〇―一八一頁）。

展覧会カタログでは、

『華麗なるバロック絵画・ワルシャワ国立美術館展』(一九九二年、熊本県立美術館、他、特に、論文、ムラフスカリムテシウス『イタリア・バロックにおける《聖なるイメージ》と宗教絵画』、一二二―一二三頁、英語原著、M・MUTHESIUS 訳註に参考文献を含む。拙訳)。

宮下規久朗『カラヴァッジョ』(名古屋大学出版会、二〇〇四年、第二章)。

同『カラヴァッジョへの旅』(角川選書、二〇〇七年)。

中村俊春「対抗宗教改革期の裸体表現批判とルーベンス・・・芸術的審判のあり方をめぐって」『西洋美術研究』二〇一二年、十六号、八五―一〇〇頁)

《フランドル版画と宗教画との関係》

宮下孝晴・吉住磨子「Evangeliacae Historiae Imagines(1593)に関する一考察・・・対抗宗教改革期におけるイエズス会の宗教美術(1)」(『金沢大学教育学部紀要・人文科学・社会科学編』一九九二年、第四一号、六五―八六頁)。

英文基礎資料では、

SORIA, « Some Flemish Sources of Baroque Painting in Spain », *AB*誌, 1948; BUSER, « Jerome Nadal and Early Jesuit Art in Rom », *AB*誌, 1976.

《フランス》

ブッサン研究について、

木村三郎「ブッサン作《ザビエルの奇跡(・・・)》の典拠について」『イエズス会』5、初出、一九八五年)。

同「神戸市立博物館蔵《聖フランシスコ・ザビエル像》について」(同書17、初出、一九九八年)。

同「ブッサンとヴィーリクス」『フランス近代』9、初出、二〇一二年)。

清瀬みさを「ニコラ・ブッサン作《階段の聖母子》」『美学』一九九〇年、十六二号、二四―三五頁)。

倉持充希「アメデオ・ダル・ポッツォのためのモーセの物語画連作・・・ブッサン、コルトーナ、ロマネッリ競演・・・」(『京都美学美術史学』二〇一〇年、九号、一〇九―一四〇頁)。

同「ブッサン作《聖エラスムスの殉教》に関する考察・・・サン・ピエトロ聖堂からの指示書の解釈を手がかりに」(『日仏美術学会会報』二〇一五年、三五号、二七―四七頁)。

同「プッサン作《羊飼いの礼拝》(ロンドン、ナショナル・ギャラリー)・・・ジョヴァンニ・カルロ・デ・メデイチのために作品という視点からの考察」『美術史』二〇一六年、一八一、八九〜一〇五頁)。

栗田秀法「プッサン作《キリストの洗礼をめぐって》」(『研究紀要(愛知芸術センター)』、一九九五年、二号、三五―五一頁)。

同「聖書挿し絵本とプッサン」(『愛知県美術館研究紀要』二〇〇二年、八巻、四一―五四頁)。

同「《エルサレム落城》(二章)、《マナの蒐集》(三章)、《エリエゼルとリベカ》、《キリストと姦淫の女》、《サファイラの死》、《足萎えの男を癒やす聖ペテロと聖ヨハネ》(『プッサンにおける語りと寓意』三元社、二〇一四年、二、三、五、八章、初出は、二〇〇九、二〇一四年のものも含む)。

望月典子「技芸が自然を助ける (Ars naturam adiuvans)・・・ニコラ・プッサン《エゼキエルとリベカ》」(『絵画と受容』二〇一四年、ありな書房、フランス近世美術叢書Ⅱ、四三〜八五頁)。

同「ニコラ・プッサンのスフィンクス・・・モーセ出生の物語をめぐって」(『哲學』二〇一四年、一八二、二五五〜二八〇頁)。

同「王の祭壇画・・・ニコラ・プッサン作《聖体の秘跡の創設》」(『日仏美術学会会報』二〇一五年、35号、九七〜一一三頁)。

ラ・トゥール研究について

田中英道『ラ・トゥール・・・夜の画家の作品世界』(造形社、一九七二年)。

平泉千枝「ジョルジュ・ド・ラ・トゥール作《大工の聖ヨセフ》」『美術史』二〇〇四年、一五七冊、一五〇―一六六頁)。

同「ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの「夜の絵画」について―そのテネブリスムの意味―」(『鹿島美術研究』二〇一一年、二八号、五〇二〜五二三頁)。

秋元優季「ジョルジュ・ド・ラ・トゥール作《マグダラのマリア》におけるオイルランプの象徴的意味」(『美術史』二〇一三年、一七五冊、八五〜一〇〇頁)。

同「ジョルジュ・ド・ラ・トゥールのカラヴァッジスム受容に関する研究・・・「炎に息を吹きかける少年」の画像を中心に」(『鹿島美術財団年報』二〇一六年、三四号、一九七〜二〇四頁)。

同「1630・40年代のパリとラ・トゥール・・・ラ・トゥールのパリ滞在周辺と

同地での評価」『国立西洋美術館研究紀要』二〇一七年、二二号、十九～三四頁

シャンパーニュ研究について

木村「フェリビアン著『シャンパーニュ伝』」『フランス近代、10、初出、二〇一〇年）

小野崎康裕「図像着想源としてのヒエログラフィカ・・・ピエリオ・ヴァレリアーノとフィリップ・ド・シャンパーニュ」(二〇一三年、科研・基盤C報告書『17世紀フランスにおけるイエズス会の挿絵本と絵画の関係についての総合的研究』)

(代 表 者 木 村 三 郎 )

[http://homepage3.nifty.com/saburo-kimura/kaken/k19520112\\_c\\_onozaki.pdf](http://homepage3.nifty.com/saburo-kimura/kaken/k19520112_c_onozaki.pdf)(2918-5-4)

木村「シャンパーニュ作『煉獄の魂を救い出す勝利するキリスト』」『フランス近代』11、初出、二〇一〇、二〇一五年)

ルブラン・ジュヴネ研究について

大野芳材「シャルル・ルブランの『十字架に架けられるキリスト』について」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』一九九九年、七、七三～九〇頁。

同「ジャンリバティスト・ジュヴネ『キリストの十字架降下』」(ルーヴル美術館蔵)をめぐって」(同年報、二〇〇一年、九、七五～九五頁)。

『イタリア』

カラヴァッジオ研究について

宮下規久朗『カラヴァッジオ』(名古屋大学出版会、二〇〇四年)。

吉住磨子「カラヴァッジオ作『蛇の聖母』の図像研究」『鹿島美術研究(年報第十五冊別刷)』一九九八年、一三一～一四二頁)。

レーニ・クエスピ・ヴィニャーリ研究について

宇埜直子「グイド・レーニ『ペストの祭壇画』に関する一考察」『美術史論集(神戸大学文学部)』(二〇一一年、十一号、一九七～二四頁)、他。

クレスピ研究について

大野陽子「甘美な魂の糧・・・ダニエロ・クレスピ『聖カルロ・ボロメオの断食』」『味覚のイコノグラフィア』ありな書房、二〇一二年、叢書・感覚のラビュラン トスⅡ、監修・解説 上村清雄、一四一～一八二、二三九～二五三頁)。

ヴィニャーリ研究について

坂本篤史「ヤコポ・ヴィニャーリとサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院」『美術史』

二〇一四年、一七七冊、五〇〜六七頁。

ガルビエーリ研究について

宇桙直子「ポローニヤ、オラトリオ・デイ・サン・コロンバーノ《哀悼》と《ゲツセマネの祈り》」・「ロレンツォ・ガルビエーリについて」(『美術史論集』二〇一八、十八号、四五〜六三頁)

グエルチーノ研究について

川瀬祐介「幻視絵画としてのグエルチーノ作《ロレートの聖母を礼拝するシエナの聖ベルナルディーノと聖フランチェスコ》」(『よみがえるバロックの画家グエルチーノ』展覧会カタログ、西洋美術館、二〇一五年、二七〜三二頁)

ジエンティレスキ研究について

川合真木子「十七世紀におけるポッツォーリ大聖堂内陣装飾画の主題と配置に関する復元的考察」(『美術史』二〇一五年、一七八、二六五〜二八二頁)

サラチェーニ研究について

宮下規久朗「召命と否認」・「伝サラチェーニ《聖ペテロの否認》をめぐって」  
『聖人と俗』・「分断と架橋の美術史」(岩波書店、二〇一八年、一七四〜一九六、三二七〜三三〇頁)

聖堂装飾画研究について

太田智子「一六〇〇年前後、ローマにおけるトスカーナ画家たちの活動」・「サン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ聖堂を中心に」(『千葉大・報告書』二〇一四年、二七九、二六〜四五頁)

同「トスカーナ大公妃の聖遺物礼拝堂における蒐集芸術委嘱開帳」(『千葉大・報告書』二〇一五年、二九四、一二〜二八頁)

聖母画像研究について

新保淳乃「危機克服の政治学における聖母マリア表象」(『美術史』二〇〇六年、一六〇冊、二六〇〜二七六頁)。

宇桙直子「ロザリオの聖母」研究(『美術史論集』(神戸大学美術史研究会)『二〇一三年、一三三号、一二七〜一三二頁)。

同「イエズス会によるポローニヤ、サンタ・ルチア聖堂の装飾事業について」(『美術史論集』(神戸大学美術史研究会)『二〇一五年、十五号、一七九〜一八八頁)。

同「十七世紀ポローニヤ派による「聖母のもとに現れる復活したキリスト」祭壇画」(『美術史論集』二〇一六、十六号、一〇九〜一一八頁)

祝祭・聖女・貧民画像研究について



新保淳乃「クアラントウーレ祝祭装置の分析……對抗宗教改革期ローマのイエズス会付属信徒会主催祝祭」『美術史』二〇〇〇年、一四九冊、七九〜九六頁。

同「17世紀初頭ローマにおける絵画様式の（総合）とその意味……サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂、オリーナ礼拝堂装飾について」『千葉大学人文研究』二〇〇九年、第三八号、四一〜六二頁。

同「貧者の身体……近世イタリア絵画を中心に」『千葉大・報告書』二〇一一年、二二三、一〜一三頁。

同「貧者のジェンダー……近世イタリアの救貧主義と貧者像の変容」『言語文化』二〇一二年、二九、一一九〜一四五頁。

同「聖女の死の表象展示記憶」『千葉大・報告書』二〇一五年、二九四、二九〜四七頁。

《オランダ》

ケンブ『レンブラント「聖家族」』(三元社、一九九二年、邦訳・加藤、独語原著、KEMP,1986)。

海津忠雄『レンブラントの聖書』(慶応義塾大学出版会、二〇〇五年)。

幸福輝「見知らぬ土地へ……レンブラントの《エジプト逃避(セーヘルス改版)をめぐって》」『版画の写像学』ありな書房、二〇一三年、叢書・イメージの探検学Ⅱ、責任編集・幸福輝、二八七〜三二九頁。

《スペイン》

ベラスケス研究について

雪山行二「ベラスケスにおける聖と俗、《マルタとマリアの家のキリスト》をめぐって」『美の司祭と巫女』中央公論美術出版、二〇〇二年、一三五〜二五四頁。

諸星妙「ベラスケス作《マルタとマリアの家のキリスト》に見る初期作品群の諸問題」『美術史』二〇〇四年、一五七冊、四〇〜五二頁。

同「ベラスケス作《法衣を授かる聖イルデフォンソス》と第一次マドリッド来訪」『ス・ラ美術史研究』二〇〇六年、七号、七一〜七九頁。

宮下規久朗「ベラスケスとカラヴァッジェスキ」『ベラスケスとバロック絵画』七〜一八頁。

グレコ研究について

門田彩「エル・グレコ作、サン・ファン・パウテイスタ施療院付属礼拝堂祭壇画《キ

リストの洗礼』をめぐって」『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』二〇〇四年、五号、十一十九頁。

同「エル・グレコ《聖イルデフォンソ》(イリエスカス、カリダー施療院)をめぐって」『美学』二〇〇八年、二三二号、八五―九八頁。

松井美智子「エル・グレコと古代(二)初期作品を中心に」(『東北学院大学教養学部論集』一五五、一―二〇頁)

その他の画家について

蘭部容子「リベラの《聖ピリポの殉教》に関する一考察」『ス・ラ美術史研究』二〇〇三年、四号、九―十七頁。

楠根圭子「スルバランのラス・クエバス修道院連作に関する一考察」(『ス・ラ美術史研究』二〇〇六年、七号、八一―八九頁)。

同「ファン・アンドレス・リシに関する一考察・・・《聖ベネディクトゥスの夕食》の主題をめぐって・・・」(『武蔵野美術大学研究紀要』三七、六一―七一頁)

同「フランススコ・パチエーコによるキリスト磔刑の画像と日本26殉教者・・・対抗宗教改革期の十字架論における日本の磔刑への言及をめぐって」(『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』二〇一八年、一九号、一七―三一頁)。

豊田唯一「ムリーリョ作《聖フスタと聖ルフィーナ》(1665-66年)に関する一考察・・・《聖レオナルドと聖ボナヴェントゥーラ》との関連をてがかりに・・・」(『ステ美術史研究』二〇一七年、一八、四一―五〇頁)

## 神話画

《一次資料》としては、カルタリー『西欧古代神話図像大鑑(全訳『古人たちの神々の姿について』二〇一二年、八坂書房、大橋喜之訳)。

《基礎的な文献》  
ヴァールブルク『サンドロ・ボッティチェッリの《ウエヌスの誕生》と《春》』(ありな書房、二〇〇三年、邦訳・富松保文、伊藤博明・監訳、叢書・ヴァールブルク著作集・第一巻(独版、原著初版、WARBURG, 1893)。

セズネック「神々は死なず(ルネサンス芸術における異教神)」(美術出版社、一九七七年、邦訳、高田勇、英語版原著 pbk SEZNEC, *The Survival of the Pagan Gods*, Bollingen Series, 1972, 仏語初版, 1940)。

初歩的な英語資料では、SEZNEC, 『Myth and Fables』, FW4, 1965(1958).

《フランス》

プッサンについて

新畑泰秀「ニコラ・プッサン作《フロラーの王国》(ドレスデン絵画館所蔵)について」『上原和博士古稀記念美術史論文集』、一九九五年、一一五―一三七頁。

同「同前・・・その図像学的源泉を中心に」『成城文藝』、一九九五年、一五六号、三四―六九頁。

同「ニコラ・プッサン作《サテュロスに跨がるニンフ》(カッセル州立絵画館蔵について)」(『鹿島美術財団年報』一九八八年、一六、三一五―三二八頁)。

同「オウイディウスの『変身物語』・・・一六・一七世紀の挿し絵本とフランス絵画(『十七世紀フランスにおけるオウイディウスの挿絵と絵画の関係についての総合的研究』平成十五年度―十七年度 科研補助金「基盤研究B 一般」)、研究報告書、二〇〇六、三九―四四頁」。

栗田秀法「オウイディウスの挿絵とプッサン・・・《エコーとナルキッソス》をめぐって」(『名古屋芸術大学研究紀要』二〇〇六年、二七巻、三九―五四頁)。

宮島綾子「ニコラ・プッサン作《バッコスの幼年時代》」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(二〇〇〇年、四六、一五一―一六八頁)。

同「ニコラ・プッサンとその周辺のフランス人画家における古代受容の一樣相」(『鹿島美術研究』二〇〇四年、二一号、二二八―二四二頁)。

同「幼いプットーを巡って」(『ルーヴル美術館展』新国立美術館、二〇〇九年、二二―二二八、二六六―二七〇頁)。

望月典子「ニコラ・プッサン作《二人のニンフと蛇のいる風景》の作品解釈」(『美術史』二〇〇一年、一五一冊、一三七―一五一頁)。

同「ニコラ・プッサンにおける古代美術の受容」『鹿島美術研究』二〇〇二年、十九冊別冊、一四六―一六〇頁)。

同「ニコラ・プッサン作《バッコスの勝利》と《パンの勝利》」(『美術史』二〇〇六年、一六〇冊、二九八―三一五頁)。

同「フロラーの庭園・・・ニコラ・プッサンの初期神話画における変身譚」(『変身の形態学』二〇一四年、ありな書房、フランス近世美術叢書、二五一―二九〇頁)

福田恭子「ニコラ・プッサンの初期神話画における場面選択の特異性……ミダス、エンディミオン、パエトンの主題表現」『美術史』二〇一四年、一七七号、一〇〇～一五頁。

拙論「プッサン作《アポロとダフネ》（ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク蔵）」『フランス近代』101～137頁。

その他の神話画の問題について（本項では、西洋十七世紀に強い影響を与えたと考えられる、十六世紀、同時に、その強い影響下から生まれた論攷も記述した）

拙論「コンテイ著『神話の手引き』（神話作家の著作の仏訳とその意味）」『フランス近代』136～147頁。

安室可奈子「フランソワ・ジュエール作《プシュケとアモル》（ルーヴル美術館蔵）について……ラ・フォンテーヌの物語のための挿絵と文学的着想源」『美術史』二〇二年、一五二冊、二四九～二六二頁。

田中麻野「ギユスターヴ・モロー作《オルフェウス》……新しい神話画の試み……」『美術史』二〇〇五年、一五九冊、一八一～三〇頁。

#### 《北方》

保井亜弓「古典主題と北方美術《ピュラムスとティスベ》」『図像の総合的研究』（平成十四～十五年度、科研報告書、二〇〇四年）。

#### 《スペイン》

大高保二郎「ベラスケス作《織女たち》」『跡見女子大学紀要』一九八〇年、一三号、一～八頁。

松原典子「エル・グレコ作《ラオコン》再考」『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』二〇〇一年、二号、九～十八頁。

貫井一美「ベラスケス作《バッカスの勝利》：ボデゴンとの関連性とその制作意図について」『地中海学研究』二〇〇一年、二四号、一〇一～一二二頁。

#### 《フランドル》

森洋子「失われたブリュゲル（？）の《イカロスの墜落》」『ブリュゲル探訪』二〇〇八年、未来社、一〇三～一三〇頁、初出、二〇〇七年。

中村俊春『ペーテル・パウル・ルーベンス』（三元社、二〇〇六年、二章、三章）。

#### 《イタリア》

伊藤博明「ウェヌスの誕生」『ルネサンスの神秘思想』（講談社学芸文庫、二〇一二

年、一三二―一三三頁、初出、一九九六年。

同「ティブルのシビュラ：中世シビュラ文献の紹介と翻訳(二)」(『埼玉大学紀要(教養学部)』二〇〇九年、四五(一)、一―十二頁)

同「ラクタンティウスと『シビュラの託宣』」(『埼玉大学紀要(教養学部)』二〇一〇年、四六(二)、二二―三七頁)

同「クウオドウルトデウスと『シビュラの託宣』」(『埼玉大学紀要(教養学部)』二〇一五年、五一(二)、三三―二八頁)

同「シビュラの行方・・・アウグスティヌスからパラッツォ・オルシーニまで・・・」(『西洋中世研究』二〇一四年、六号、八八―一一一頁)

同「サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のシビュラ像について」(『専修人文論集』二〇一八年、一〇二号、一二七―一五九頁)

同「セッサ・アウルンカ大聖堂のシビュラ像について」(『専修大学人文科学年報』二〇一八年、四八号、二七―六二頁)

渡辺晋輔「ラファエツロの版画戦略と版画家の創意・・・アンニーバレ・カラツチ《歧路に立つヘラクレス》との関係をめぐって」(『版画の写像学』ありな書房、二〇一三年、叢書・イメージの探検学Ⅱ、責任編集・幸福輝、二八七―三二九頁)

大塚優美「グエルチーノによる一六五一年制作のシビュラ作品に関する一考察」(『美術史論集』二〇一八、十八号、一〇七―一二七頁)

山岸龍郎「オルフェオ・・・クレモナ・マントヴァ・そしてオペラの生誕」(『オペラのイコノロジー』ありな書房、二〇〇一年、叢書・オペラのイコノロジー、第2巻)

### タツソによる主題に基づく絵画

新保淳乃「『解放されたエルサレム』の絵画化・・・近世イタリアの女戦士表象を中心に」(『千葉大・報告書』二〇一四年、二七九、四六―六〇頁)

同「《タンクレディとエルミニア》における癒しの表象・・・叙事詩から絵画へ」(『千葉大・報告書』二〇一六年、三〇五、一八―二八頁)

同「叙事詩から戦争画へ・・・十七世紀イタリアの戦争画と死傷兵の表象」(『千葉大・報告書』二〇一七年、三二一、三五―四三頁)

同「未完テキストとしてのアマゾネス・・・女戦士表象分析のための研究ノート」  
〔千葉大・報告書〕二〇一八年、三三九、九〇一七頁

## 寓意画

### 《フランス》

伊藤博明「サドとアレゴリー」〔ユリイカ〕二〇一四年、九、一二八〜一四〇頁

大野芳材「ル・ブラン作《アポロンの間》装飾について」〔美術史論叢〕一九九〇年、六号、一二七〜一四五頁。

小野崎康裕「《イコノロギア》のミューズ像と十七世紀西欧絵画に対するその影響について(一)」〔研究紀要(川村短期大学)〕一九九八年、一八号、一三三〜一四八頁。

木村「フランス近代における《慈愛の寓意》と炎の凶像」〔フランス近代〕14章、初出は、二〇一二年。

同「フランス革命期における「友愛」の凶像」(同書、16章、初出は、二〇一四年)。

### 《オランダ》

デ・ヨング『オランダ絵画のイコノロギ』(日本放送協会、二〇〇五年、監訳・小林、邦訳・望月他、原著、DE JONGH, 1995)。

尾崎彰宏「レンブラントとメラニコリー」〔「古典主義」美術の理論的研究〕平成一四―一五年度科研報告書、一二一―一四〇頁。

川瀬祐介「リベールの《五感》連作と写実性について」〔ス・ラ美術史研究〕二〇〇年、三号、十一―二十頁。

### 《イタリア》

新保淳乃「カリタスの糧・・・カラヴァッジョ《七つの慈悲のおこない》」〔味覚のイコノグラフィア〕ありな書房、二〇一二年、叢書・感覚のラビュラントスII、監修・解説 上村清雄、五一〜九八、二二二〜二三二頁

伊藤亜紀「青い《嫉妬》・・・『イコノロギア』と15―16世紀の色彩象徴論」〔美学〕二〇〇四年、二一九号、一〜二三頁

### 《スペイン》

川瀬祐介「リベールらの「五感」連作と写実性について」〔ス・ラ・ラテン美術史研究〕

二〇〇二年、三、一一〜二〇頁)

貫井一美「バルデス・レアル作『虚無のアレゴリー』」『救済のアレゴリー』… ヴァニタス画に描かれた「本」の持つ意味」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』二〇一五年、二三、一九〜四九頁)。

《イギリス》

植月恵一郎「<時の翁>の変容・Andrew Marvellの<草刈人>について」(CLARITAS・現代アイルランド研究会、一九九九年、十二号、一一九頁)。

《チェコ(プラハ)》

タピエールドルフ二世の宮廷芸術…その独自性と普遍性」『神聖ローマ帝国皇帝・ルドルフ二世の驚異の世界展』一八〜二五頁、邦訳・遠藤浩子、TAPPE, A.) 必ずしも、寓意画だけを扱ったものではない。

基礎的な概論の英語資料では、

LASH, etc.《Allegory: Allegory of Art 》, DA, 1996

風景画

入門的な英語文献では、

CLARK,《Landscape in Art 》, EWA, (1958)1964,  
LANGDON, 《Landscape Painting 》, DA, 1996.

全般を扱う個別文献としては、

クラーク『風景画論』(ちくま学芸文庫、二〇〇七年、邦訳・佐々木英也、旧版、一九六七年、美術名著選書、原書英語初版・一九四九年、英語版pbkでは、*Landscape into Art*, Murry,(1976, 1979)。

藤田治彦『風景画の光』(講談社、一九八九年)。

わが国にあるヨーロッパの風景画の作品については、

『ヨーロッパの風景画』(国立西洋美術館、一九七八年、カタログ…越宏一、他)。

『静岡県立美術館コレクション二一〇選』(一九九一年、編集・発行…静岡県立美術館)。

《フランス》

ロランについて

高階秀爾「クロード・ロラン…魅惑の風景の画家」『みづえ』、一九八三年、九二六号、四六〜七一頁)。

藤田治彦「ピクチャレスク・ランドスケープ……クロード・ロランの風景画をめぐって」『人文』、一九八七年、三六号、四七―七一頁。

小針由起隆「クロード・ロランの素描『古典的風景』とパレット・コロナノのレスコ画装飾」『静岡県立美術館紀要』一九九三年、一〇号、二〇―二二、三七頁。

同「ジャック・カロとフイレンツェ……大狩猟をめぐる一考察」『版画の写像学』ありな書房、二〇一三年、二八七―二八六、372―376頁。

同「クロード・ロランとタツソ……『エルミニアと羊飼』を考える」『絵画と受容』ありな書房、二〇一四年、一二―一四頁。

同『クロード・ロラン』（論創社、二〇一八年）。

藤田治彦「シバの女王の乗船」『名画』第十二巻、一九九四年、九六―一〇五頁。

新畑泰秀『明るい窓……風景表現の近代』（二〇〇三年、横浜美術館、展覧会カタログ、一、三章）

プッサンについて

栗田秀法「西洋近世における自然と人間―プッサンの理想的風景画をめぐって―」（名古屋大学日本近現代文化研究センター『Juncture（ジャンクチャー） 超域的日本文化研究』第四号、二〇一三頁）。

同「ニコラ・プッサン（四季）連作……その意味構造をめぐって」『絵画と受容』ありな書房、二〇一四年、八七―二二〇、三〇五―三〇八頁。

福田恭子「ニコラ・プッサン作『足を洗う女』のいる風景」とミシェル・パッサール……古代ローマ、ウエエラブルムの風景」『美術史』二〇一八年、一八四、二五二―二八一頁）

平易な英文論文は、

BLUNT, 《The Heroic and the Ideal Landscape in the Work of N. Poussin》, *JMCI* 誌, 1944

十八世紀については、

島本流「風景と眺め（1）、一八世紀フランス風景画をめぐって」『芸術論究』（帝塚山学院大学美学美術史研究室、一九九〇年、第十七編、十五―三七頁）。

同「同（2）」『芸術論究』帝塚山学院大学美学美術史研究室、一九九一年、第一八編、二九―四九頁）。

《イタリア》



小針由起隆「サルヴァートル・ローザの《フイグリーネ》と西洋風景画の伝統」(『静岡県立美術館紀要』一九八八年、六号、五一〜六九頁)。

#### 《オランダ》

兼重護「レンブラントの風景画」(『長崎大学教育学部人文科学研究報告』一九八一年、三〇、四一〜四九頁)。

小林頼子他『一七世紀オランダ風景画展』展覧会カタログ(一九九二年、東京ステーションギャラリー、他)。

幸福輝「世界地図(マップ・ムンデイ)から世界風景へ」(『美の司祭と巫女』中央公論美術出版、二〇〇二年、一三二〜一六一頁)。

兼重護「レンブラントの風景画」(『美の司祭と巫女』中央公論美術出版、二〇〇二年、一八一〜二〇〇頁)。

#### 《スペイン》

川瀬祐介「17世紀スペインにおける風景画制作史序論」(『ブラド美術館展(ペラスケスと絵画の栄光)』展覧会カタログ、二〇一八年、西洋美術館、三一〜三六頁)。

#### 風俗画

高橋達史「風俗画の類型学」(『月刊百科』一九八四年九月、同八五年三月、六月、七月、十二月、同八六年二月、同八七年一月、三月の各号に連載)。

個別研究では、

#### 《フランス》

栗田秀法「ル・ナン兄弟の農民画」(『農民の家族』をめぐって) (『絵画と表象』二〇一五年、ありな書房、フランス近世美術叢書、五一〜八六頁)。

平泉千枝「ジョルジュ・ド・ラトゥールの《いかさま師》」(『逆転の構造』(『絵画と表象』二〇一六年、ありな書房、フランス近世美術叢書、六一〜九八頁)。

#### 《フランドル・オランダ》

森洋子『ブリュゲルの「子供の遊戯」』未来社、一九八九年。

同『子供とカップルの美術史』NHKブックス、二〇〇二年。

フェルメール・レンブラント研究では

小林頼子『フェルメールの世界・17世紀オランダの風俗画の世界』NHKブックス、一九九九年。

尾崎彰宏「資料編」『レンブラント、フェルメールの時代の女性たち』小学館、二〇〇八年、二三五―二五二頁。

青野純子

「17世紀末から18世紀前半のオランダ風俗画研究・・・17世紀オランダ「黄金時代」の継承と革新」『鹿島美術財団年報』二〇〇九年、二七号別冊、一〇～二二頁。

宮下規久朗『フェルメールの光とラ・トゥールの焰・・・「闇」の西洋美術史』小学館、二〇一一年、小学館101ビジュアル新書

メツ・ダウ・フェルメール研究では、

青野純子「ハブリエル・メツ」『新生児の訪問』をめぐる「考察」『美術フォーラム21』二〇一六年、三三号、五三～五八頁

同「市場戦略としての17世紀オランダ農民画礼賛・・・1748年パリの競売目録の記載を手がかりに・・・」『ヨーロッパ研究』（東北大学国際文化研究科）二〇一五年、十号、七五～九七頁。

同「ヨハネス・フェルメール『音楽の療法』・・・ハブリエル・メツとの対話をめぐる考察」『ネーデルラント美術の魅力・・・ヤン・ファン・エイクからフェルメールへ』ありな書房、北方近世美術叢書Ⅰ、二三五～三二二頁。

同「ヘリット・ダウ『若い母娘』・・・18世紀オランダ絵画市場と絵画の価値」『ネーデルラント美術の光輝・・・ロベール・カンパンから、レンブラント、そしてヘンドリック・ダウへ』ありな書房、北方近世美術叢書Ⅱ、一七五～二〇八頁。

入門的な英語資料では、

WASHBURN, 《Genre and Secular Subjects》, *EWA*, (1958) ;

LANGDON, 《Genre》, *DA*, 1996.

## 静物画

ゴンブリッチ「西欧の静物画における伝統と表現」『棒馬考』、一九八八年、勁草書房、十八三―二一〇頁、邦訳・二見史朗・谷川渥、横山勝彦、原著英語版 *publ. GOMBRICH, Meditation on a Hobby Horse*, 1963, Phaidon)。

吉住磨子「ああ桃よ、他のなによりも祝福され・・・カラヴァッジョ時代の性的な暗喩に満ちた静物画」『味覚のイコノグラフィア』ありな書房、二〇一二年、叢書・感覚のラビュラントスⅡ、監修・解説 上村清雄、九九～一三九、二三一～二

三九頁)。

豊田唯一「トーマス・イエペス《ブドウの樹のある風景》再考」(『ス・ラ美術史研究』二〇一六、一七、一―一二頁)

展覧会カタログとしては

森洋子「静物画の交流・・・アルプスの北と南」(『イタリア美術展・・・知られざる静物画の伝統』一九八六年、埼玉県立近代美術館、SALERNO、他、二九―四二頁)。

『静物・・・ことばなき物たちの祭典』(一九九〇年、静岡県立美術館、カタログ・小針由紀隆、他)。「静物・・・その歴史と現在」(一九九〇年、静岡県立美術館、シンポジウム報告書、若桑みどり「静物画の象徴的意味」、他)。

アスイローニス(Esielonis)「序」(『ボストン美術館所蔵・静物画名品展』(一九九三年、そごう美術館、他、邦訳・富田章、八一―十五頁)。

入門的な英語資料では、

VAN MIEGROET, D4, 1996.

英語版 pbk では、

STERLING, *Still Life Painting*, Harp and Row, (1952) 1981°

BRYSON, *Looking at the Overlooked*, Harvard University Pr., 1990.

《オランダ》

兼重護「十七世紀オランダの静物画・・・その発生と意味について」(『日蘭学会会誌』一九八七年、第一〇巻、第二号、六三―一三三頁)。

堤委子「十七世紀オランダの花草画成立に関する一考察」(『日蘭学会会誌』一九八七年、第一二巻、第一号、二九―四六頁)。

千速敏男「十七世紀オランダにおける静物画の成立について・・・ヴァニタスの理念を中心に」(『美学』一九八七年、一五一号、三四―四七頁)。

デ・ヨング、邦訳、二〇〇五年(既出、原著、1995) 第五章。

尾崎彰宏「オランダ美術における聖と俗・・・静物画の勃興をめぐって」(『西洋美術研究』二〇〇九年、一五、八四―九九頁)。

《イタリア》

展覧会カタログとして「序文」(『イタリア美術展・・・』既出、二二―一九頁)。

若桑みどり「イタリア静物画の歴史的意味」(既出『イタリア美術展・・・』二四―二六頁)。

《スペイン》

遠藤恒雄「ベラスケス初期作品の一考察・ボデゴネス絵画の意義」『美学』一九七〇年、二一―四七頁。

同「十七世紀スペイン静物画……『ボデゴン』の神秘主義的性格」『芸術と民族』玉川大学出版部、一九八四年、七三―二〇八頁。

同「スペイン・ボデゴン（静物画）の成立について」『芸術分類の形態と原理』多賀出版、一九八九年、六八―四頁。

堀越公恵「17世紀におけるベラスケスのボデゴン」『ス・ラ美術史研究』二〇〇〇年、一―号、一三―二〇頁。

展覧会カタログとしては、

サンチェス SANCHEZ (A. E. P.)・雪山行二『スペイン・リアリズムの美……静物画の世界』（一九九二年、国立西洋美術館、邦訳、岡田裕成他、八九―一二〇、一二七―一三三頁）。

## 歴史画

個別研究では、

栗田秀法「〈コリオラスス〉……戦争と平和の寓意」『プッサンにおける語りと寓意』三元社、二〇一四年、三―六、初出・二〇〇七年。

同「英雄的風景画の成立と物語画……フロンドの乱への応答」『プッサンにおける語りと寓意』三元社、二〇一四年、三―七、初出・二〇〇七年。

拙論「ラ・ヴリリエール邸ギャラリーとローマ古代史を描く歴史画」『日本大学芸術学部紀要』二〇一二年、五五号、六一―七七頁。

宮島綾子「デキウス・ムス連作……ルーベンス芸術のマニフェステーション」『リヒテンシュタイン』展覧会カタログ、二〇一二年、一九八―二〇五頁。

〔同時代の政治〕

佐々木真『ルイ14世期の戦争と芸術』（作品社、二〇一六年）

初歩的な英語資料では、

BATTISTI 《Historical Subjects》, *EMA*, 1963 (1958).

## 肖像画

スペイン

大高保二郎「ベラスケス作「ラス・メニーナス」……主題と構想をめぐって」『美

術史』一九八一年、一一〇冊、一一三〜一二九頁）（同『スペイン・美の貌』ありな書房、二〇一六年、第3章に採録）

同「《ラス・メニーナス》の落とし穴：HOWをめぐる」、『美学・美術史学科報』（跡見学園女子大学）一九九二年、二〇、一〜十一頁）

同「ベラスケスと、狩猟塔、の絵画装飾…王家トポスの理念と機能」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二〇一三年、五九、二三〜四四頁）

同「ベラスケス作《彫刻家モンタニユースの肖像》をめぐる諸問題」（同『スペイン・美の貌』ありな書房、二〇一六年、第2章、初出、二〇〇二年）

ケーガン KAGAN「エル・グレコの肖像画」、『エル・グレコ展』カタログ、二〇一三年、東京都美術館、一七八〜一八一頁、付欧文）。

#### フランドル

中村俊春「フェリペ4世の宮廷とルーベンス」、『ベラスケスとバロック絵画』…影響と同時代性、受容と遺産』二〇一六年、公開国際シンポジウム報告集、豊田唯、坂本龍太編、十九〜二五頁

#### オランダ

高橋達史「自画像の需要と画家のイメージ…レンブラントとその時代」、『自画像の美術史』二〇〇三年、東京大学出版会、六五〜九四頁）。

#### フランス

宮島綾子「フランス王立絵画彫刻アカデミー(1648-1793)における女性画家と肖像画」、『ルーヴル美術館展(肖像芸術)』展覧会カタログ、二〇一八年、一七四〜一八二頁）

〔東西交渉史における研究（二〇〇七年以降の論攷に限る）〕

#### 〔宗教画〕

拙著『イエズス会図像』（二〇〇七年、三三四〜三五二頁）

児島由枝「かくれキリシタン聖画比較研究」、『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書（論考編）』二〇一三、四五〇〜四六五頁）

浅見雅一「キリシタン教会の殉教録と聖人伝…ヨーロッパから日本・中国へ」、『東西絵入り本の交流…15〜17世紀における絵入り本の世界的比較研究の基盤形成』私立大学戦略的研究基盤形成支援事業・研究成果報告書（平成21〜25年度）、二〇一四年、3月、六一〜六九頁）

宇笠直子「《マリア十五玄義図》再考……「神殿奉獻」場面を中心に」『美術史論集』二〇一四年、五五〜六五頁)

児嶋由枝「日本二十六聖人記念館の《雪のサンタ・マリア》とシチリアの聖母像」『イタリア学会誌』二〇一五年、六五、一六七〜一八八頁)

中西保仁「イエズス会と活版印刷術」『ヴァチカン教皇庁図書館展口……書物が開くルネサンス』二〇一五年、印刷博物館、展覧会カタログ、二〇七〜二三〇頁、他に、樺山、雪嶋氏等の論攷を含む)

拙論「祭壇画としての《マリア十五玄義図》について……「とりなし図像」の視点から考える」『描かれたザビエルと戦国日本』勉強出版、二〇一七年、鹿毛敏夫編、一一九〜一三二頁)

池上英洋「イエズス会の美術戦略……試行錯誤と世界伝道」

(展覧会『遙かなるルネサンス……天正遣欧使節がたどったイタリア』二〇一七年、神戸市立博物館、他、頁指定無し)

岡田裕成「金雲たなびくノアの大洪水……交通する世界美術と桃山の日本」『大航海時代の日本美術』二〇一七年、九州国立博物館、展覧会カタログ、一七一〜七七頁)

小林頼子・望月あや『グローバル時代の夜明け……日欧文化の出会い・交錯とその残照・一五四〜一八五三』(晃洋書房、二〇一七年、静物画・風俗画論等も含む)

越川倫明「カトリック長崎大司教区所蔵《聖母マリアの御絵》に関する美術史的考察」『長崎歴史文化博物館研究紀要』二〇一八年、第十二号、十七〜四五頁)

#### 〔静物画・風俗画〕

幸福輝(編)『17世紀オランダ美術の東洋表象研究』(国立西洋美術館、二〇一七年、高城、幸福、桜庭、青野、日高、深谷、尾崎、ウエストステイン、チンフェイ、各氏の論攷を含む)

#### 〔歴史画・肖像画〕

坂本満・岡泰正、他『南蛮美術の光と影……泰西王侯騎馬図屏風の謎』(二〇一一年、サントリー美術館他、展覧会カタログ)

#### 〔全般〕

鷺頭桂「「新桃山展」の仲間たち」『大航海時代の日本美術』(既出、一七八〜一八四頁)

### ③ 図像学方法論・学派論

#### 《ヴァールブルク学派》

著作集については、ヴァールブルク著作集、ありな書房、全八巻（予定）、(WARBURG)、が伊藤博明氏を中心としたチームで進行している。ここでは、本書に関係をした若干の論考だけを記述する。

方法論とその歴史的な意味については、

ギンズブルグ「ヴァールブルクからゴンブリッチへ」(『神話・寓意・徴候』せりか書房、一九八八年、邦訳・竹山博英、四五―一二頁、伊語版原著、GINZBURG, 1966)。

ゴンブリッチ『アビ・ヴァールブルク伝』(一九八六年、晶文社、邦訳・鈴木杜幾子、原著英語版、GONBRICH, 1970, 1986)。PODRÓ, 1982, 前掲書、第Ⅲ、IX章。

松枝到(編)『ヴァールブルク学派・文化科学の革新』(ヴァールブルク・コレクシオン、一九九八年、平凡社、ビアオオストツキ、ビング、カツシラー、ヘクシャ、若桑、前田、村上、上山等諸氏の論考)。

コーザー「E・パノフスキーとアメリカにおける亡命美術史家の影響」(『亡命知識人とアメリカ』岩波書店、一九八八年、二八四―二九〇頁、英語版原著、COSER, 1984)。

英語版 *DoK* では

HOLLY, *Panofsky and the Foundations of Art History*, 1984, Cornell UP

ヴァールブルクの具体的な研究は、

鈴木杜幾子・吉祥寺尚子・澤井繁男「スキノファイア壁画(四月)」(『名画』第六巻、一九九三年、七六―九五頁)。

伊藤博明「解題・・・アビ・ヴァールブルクとポッティチェリ研究」『サンドロ・ポッティチェリの《ウエヌスの誕生》と《春》』(二〇〇三年、ありな書房、既出、一三五―二一〇頁)。

《方法論》については、

プッサン解釈学のドイツにおける展開について詳しい紹介として、

松井秀法「意味生成の現場に・・・オスカー・ベッチュマンの美術史解釈学について」(『美学美術史研究論集』一九八九年、第七号、六七―九〇頁)。

類型論については、

拙論『イエズス会』(序、註3)、並びに、「パノフスキー著「ニコラ・プッサン作《アルカディア》論」における類型分析」『フランス近代』大1章、他の数章」

具体的な資料の整理については、  
藤田実「ある研究所にて・ルネサンス精神史の研究を深化させた宝庫」〔不死  
鳥〕一九八四年、五五号、五―六頁）。



## 第八章 絵画とコレクター……来歴から絵画を考える

### 来歴論・コレクション論

来歴論とコレクション論は重複する場合が多い。

《入門的な論考》では、

高階秀爾『芸術のパトロンたち』（岩波新書、一九九七年）。

《ルーヴル美術館の収蔵作品の来歴資料》としては、

本論に重複するものとして、拙論「ルーヴル収集秘話Ⅲ・北方ルネサンス」『芸術新潮』（一九八五年、一月、一〇三―一〇六頁、詳しい欧文献はこの小論に掲載してある）。またこの年の同誌には、さまざまな、ルーヴル美術館来歴論が掲載された。

《画家と注文主との関係・コレクション》については、

『美術コレクションを読む』（慶応大学出版会、二〇一二年、監修・遠山公一・銀山弘昌。本書は、『テキストとしてのコレクション』アート・コレクション制度の成立とその読解』平成一九―二一年度科研報告書、二〇一〇年、に基づく）。

『芸術のパトロネージ』（平成元―二年科研研究成果報告書、一九九一年、穴戸「…Giberti…」、元木「中世末期の宮廷肖像…」、松井「ベラスケス…フェリペ四世像」、森「…下院装飾画コンクール…」）。

フランドル美術では、

尾崎彰宏「ヴァン・ダイク《向日葵のある自画像》をめぐって」…画家と美術愛好家のインターフェース』『美術史学（東北大学）』二〇〇一年、二二号、八七―一〇七頁）。

スペイン美術では、

諸星妙「フェリペ三世時代のスペインのコレクション」『美術コレクションを読む』二〇一二年、慶応義塾大学出版会、遠山公一、金山昌弘編、三〇七―三三〇頁）

イタリア美術では、

HASKELL (Francis), 「講演 ヴェネツィア美術と十七―十八世紀におけるイギリスのコレクター」(『西洋美術研究』二〇〇二年、八、六一―二〇頁、邦訳・伊藤拓真【訳】、小佐野 重利)。

金山昌弘「調度としての絵画」(『美術コレクションを読む』二〇一二年、慶応義塾大学出版会、遠山公一、金山昌弘編、一六一―一八七頁)。

英語版 pbk と cpb、HASKELL, *Patrons and Painters*, Yale UP, 1980.

ベラスケスに関わる問題を論じた、著名な論考としては、  
COSTELLO, *JWCI* 誌, 1950。

フランス美術では、  
望月典子「17世紀パリにおける美術収集」（既出、科研報告書、二〇一一年、一四一―一五一頁）。

望月典子「一七世紀パリにおける「好事家たち（キュリユー）」の眼差し」（『美術コレクションを読む』二〇一二年、慶応義塾大学出版会、遠山公一、金山昌弘編、二八一―三〇六頁）。

大谷公美「フランソワ・カコー・・イタリヤ駐在フランス人外交官の絵画コレクション」（『美術コレクションを読む』同書、三三一―三五四頁）。

フーケについては、デュビー、マンドルー『フランス文化史Ⅰ』（人文書院、前川貞次郎、他訳、一九六九年、原著仏語版、MADROLU, 1958）。

オーストリアにおける収集については、  
クレフトナー KRÄFTNER「ある侯爵家の収集史」（『リヒテンシュタイン』展覧会カタログ、二〇一二年、四二―二六頁）。

森洋子「リヒテンシュタイン侯爵家コレクションの二人の偉大な立役者」（同前、二〇一二年、一八九―一九七頁）

### 天井画と絵画のなかの光

『カラヴァッジオの宗教画』については、  
宮下規久朗『バロック美術の成立』（山川出版社、二〇〇三年、世界史リブレット、七七）。

同『カラヴァッジオの旅』（角川選書、二〇〇七年）。

専門性が高いものでは  
山本みどり「カラヴァッジオ《聖マタイ伝》の制作年代」（『美術史』一九六二年、上、四四冊、一二〇―一二八頁、下、四五冊、一五―二四頁）。

宮下規久朗『カラヴァッジオ』（名古屋大学出版会、二〇〇四年）。

英語版 pbk 版は、**FRIERDLAENDER, *Caravaggio Studies*, (1955) 1972 Schocken.**

『カラヴァッジオと北方の画家との関係』については、  
田中英道「ラ・トゥール」（一九七二年、造形社）。

小林頼子「テル・ブルツヘンとカラヴァッジスム」『美術史』一九八七年、一二一  
号、十七―三二頁）。

小林頼子『フェルメール論…神話解体の試み』（八坂書房、一九九九年）。

英語版 pbk では、

SPEAR, *Caravaggio and His Followers*, Icon, (1971) 1975, rev. ed.

《フェルメールと光》については、

中村光一「写真的視覚と表現の源流(1)・・・フェルメールのカメラ・オブスクー  
ラ使用を中心に」『日本写真学会誌』、一九九二年、第五五巻、第六号、四二九―  
四三五頁）。

英語版資料では、

SEYMOUR, «Dark Chamber and Light-Filled Room», *AB* 誌, 1964

《十七世紀の天井画》については、

柴洋美「バロック天井画における視点の問題」『人間文化研究年報』一九八〇年、  
四号、一四三―一五四頁）。

浦上雅司「ピエトロ・ダ・コルトーナの初期の活動について」『美術史論叢』一九  
八五年、二号、七五―八八頁）。

石鍋真澄「イエズス会の伝道の寓意」『名画』、第十一巻、一九九三年、一一六―  
一三五頁）。

英語資料としては、

GOLDSTEIN, « Studies in Seventeenth Century French Art Theory and  
Ceiling Painting », *AB* 誌, 1965.

## 第二部 西洋近代絵画の学び方

### 第一章 美術史研究の実際的方法・・・フィールド・ワークの意味と画像資料

#### 情報カード・システム

《カード・システム、ファイリング・システム》については、梅棹忠夫『知的生産の技術』（一九六九年、岩波新書）。

『ファイリングの実際』（一九八六年、イトーキ・ファイリング研究室。有斐閣）。

山根一眞『情報の仕事術』（日本経済新聞社、全三巻、一九八九年、特に、第二巻「整理」）。

同&情報山根組『A4革命』（日本経済新聞社、一九九三年）、には、袋ファイル・システムの使用例がある。『コクヨ・ファイリング・システムのおすすめ』（コクヨ）。

《押ししファイリングと資料の破棄の方法》については、中公新書の、野口悠紀雄『「超」整理法』（一九九三年）。

同『「超」整理法3』（一九九九年）。

《絵はがきと美術史資料》については、拙論『絵はがきと美術研究・ウィット・ライブラリーのこと』『アート・ドキュメンテーション通信』（一九八九年、第一号、二頁）。

#### 美術館・図書館に展示・収蔵された絵画等の写真撮影

《写真撮影の方法については》、

鈴木昭夫・吉田成・岡宮誠一・鷺野谷秀夫『研究者のための資料写真の撮り方』（理工学社、一九九一年）。

《取材・撮影旅行の実際》については、

森本哲郎、三留理男、妹尾河童、他『太陽』一九八七年、三〇八号、二五〜五〇頁、特集・快適旅行術、私の旅と旅仕度。

比嘉飛鳥「画像アーカイブ作成におけるアナログ写真の役割と選択」『アート・ドキュメンテーション通信』（二〇〇七年、一三一―一五頁）。

中川裕美、「日本大学総合学術情報センターにおけるデジタル・アーカイヴ構築の実践」『アートドキュメンテーション研究』（二〇〇九年、十六号、二八〜四二頁）（同センター編『デジタルミュージアム研究プロジェクト』報告書二〇一〇年、一六一〜一八〇頁に再録・色彩図版）も参照。

### 展覧会カタログの意味と歴史

島本浣『美術カタログ論』(三元社、二〇〇五年)。関連文献は、この著書の参考文献の欄に詳しい。ここでは、ここに示るされていない情報を追加しておきたい。

新畑泰秀「島本浣著く美術カタログ論」記録・記憶・言説〈(書評)〉『美學』二〇〇六年、二二七号、八四―八六頁)も参照されたい。

フランスでの歴史は、  
本章と若干重複するが、拙論「ピエール・ローザンベールの精緻な世界・・(美術図書館学」の勝利」『日本18世紀学会年報』(一九八八年、六月、第三号、十五―十七頁)。

英語版 *DoA* 資料としては、

POINTON, *History of Art* (1986, 初版1986) のなかに一章紹介がある。

### わが国にけるカタログのありかた

吉村良夫「美術カタログと著作権」『朝日新聞』(一九八七年、三月四日、夕刊、七面)。

中島理壽「日本の展覧会カタログについての一考察」『現代の図書館』(一九九〇年、二八号、四号、二二六―二三三頁)。

本江邦夫「学術的なカタログの性格について」『現代の眼』(一九九一年、四三六号、一―二頁)。杉浦博「美術展カタログのあゆみ」同(三―四頁)。

伊藤真「展覧会用のカタログに関する判決について」同(四―六頁)。

岡田毅「展覧会図録の収集と公開」同(六―七頁)。

種市正晴・大江長二郎「展覧会カタログ収集に関するアンケートの結果報告」『アート・ドキュメンテーション通信』(一九九一年、一一号、一―四頁)。

篠塚富士男「展覧会カタログに関する取扱い及び解説とコーディングマニュアル(展覧会カタログに関する抜粋集)の策定について」『アート・ドキュメンテーション通信』二〇〇六年、七〇号、二二―二六頁)。

## 補遺口 西洋美術辞典を使う

彫刻の場合は、BOSTROM (2004,後出)、建築では、PEVSNER(独版 1992,後出)、工芸では、CAMPBELL(2006,後出)を併用された。

無論、THEIEME und BECKER (1907-50)、*Lexikon der Kunst* (1994, Seemann); BENEZIT (1999, 英語版 2006)、そして現在も刊行中の *Allgemeines Künstlerlexikon* (1983, Saur) が重要なことはいままでもない。しかし、ともにフランス語、ドイツ語だということ、情報が過多だということもあり詳述を控えたい。

美学美術史における伝統的な参考図書教育では、修士論文を終わった水準の院生諸君が留学し本格的な研究を始めてからも、その習得には数年はかかるものである。一例であるが、筆者の場合、ドキュメンタリスト養成という目的もあって、そうした基礎作業を、敢えて修士課程の間に集中して学習させている。その成果の一部は、その後の研鑽の成果も含めて『アート・ドキュメンテーション研究』に掲載された、太田瑞穂(二〇〇三)、一瀬あゆみ(二〇〇六)、田中麻野(二〇〇七)各氏の研究の中に認められる。

ちなみに、この方法では、以下の資料と文献を基礎的なテキストとしている。『西洋美術史のための参考図書と東京を中心としたその所在地』日仏美術学会実行委員会、一九八七年(統括・木村二郎)。  
拙著『名画を読み解くアトリビュート』淡交社、二〇〇二年。

なお、日本大学大学院芸術学研究科における指導のあり方については、本HPにおける関連頁を参照されたい。その成果物は、『日本大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻博士前期課程・修了制作・論文集』(平成十一〜二十二年度)  
日本大学芸術学部 OPAC、<http://opac.art.nihon-u.ac.jp/opac/index.html>

## 補遺三 美術情報を探す・・・西洋美術文献和書資料のための書誌学入門

〔拙著『西洋近代絵画に見方・学び方』には、この補遺三、並びに、次の、補遺四に対応する部分はない〕

ここでは、西洋美術史を研究しようと思った際の初歩的な書誌を紹介したいと思う。西洋の近代絵画研究という目的のために文献研究を開始しようとした人が何から調べ始めたらいのか、という基本的な疑問に答える手段が、わが国の通常の教育からは抜け落ちているからである。次章の案内も同じ主旨から書かれている。

### 一 美術史関係参考図書とは何か

#### 1 参考図書についての全般的な資料

『日本の参考図書』日本図書館協会他（編）、二〇〇二年、第四版、このなかの「芸術・美術」（七六一―七八三頁）には、書誌、辞典、事典、基礎資料、便覧、全集、図録、年表、などが、解説付きで明記されており、美術関連分野を含め、第一級の参考図書の案内である（千速・水谷他）。

『改訂新版・調査研究・参考図書目録』図書館流通センター、二〇〇二年、二巻、一九八七―二〇〇二・六収録、六六二―六六四（建築）、八二六―八四八（芸術・美術）頁。

『参考図書解説目録（二〇〇三―二〇〇七）』日外アソシエーツ、二〇〇八年、九二六―九三九（芸術・スポーツ）、六九五―六九六頁（建築）。

個々の事典などに目次等を記入し解説が詳しい。

BALAY(ed.), *Guide to Reference Books, American L.A., 11th.* の中の 'Art and Architecture' の項目(p.648-692)には CHIPMAN が執筆した、本格的ではあるが、基礎的な美術史関係の書誌の解題がある。西洋美術史の領域で重要な、複数の巻から成り立つ参考図書の調査に有効。初版刊行年、巻数などを確認する際には、特に、著者名による巻末の索引からの検索が役にたつ。

拙著「読書案内」『名画を読み解くアトリビュート』（淡交社、二〇〇二年、一四二―一五五頁）。図像学についての和書。洋書の参考図書について解題をつけて記述してある。

#### 2 図書を収蔵図書サイトと目録から探す

##### a. インターネットから探す

##### OPAC

所属大学の Online Public Access Catalog（略して OPAC）とは、図書館において公共利用に供されるオンライン蔵書目録を示す。先ず、身近なこのサイトから検索

し、所蔵の有無、または書誌事項を確認する。

美術館横断検索 <http://alc.opac.jp/>  
東京国立近代美術館、国立新美術館、東京都現代美術館、横浜美術館、国立西洋美術館、東京都写真美術館、東京国立博物館、江戸東京博物館  
の美術図書室から、横断的に検索するシステム

愛 知 県 文 化 情 報 セ ン タ

<http://www.aac.pref.aichi.jp/frame.html?bunryo/a-lib/main.html>  
芸術に関する資料を広範囲に収集・公開している図書室。美術等に関する図書や、  
展覧会カタログを収集。洋書も現在入手不可能なモノグラフを多数所蔵。

東京文化財研究所・研究資料データ・ベース

<http://archives.tobunken.go.jp/internet/index.html>  
美術図書・展覧会カタログ・売立目録・写真原板等。西洋美術史にとっても、現在は  
入手が困難な版画目録や戦前刊行のルネサンス関係洋書が検索可能。Da Vinci  
等の項目で検索するとよい。冊子体の目録もある。『東京文化財研究所蔵書目録』  
二〇〇二―二〇〇八年、全七巻、西洋美術史にとっては、特に「西洋美術関係・欧  
文編・和文編」(一)、「外国雑誌」(七)。

東京日仏会館図書室

<http://www.1.fiftokyo.or.jp/>  
美学美術史系学科のある大学図書館が充実していなかった時代に収蔵された、フラ  
ンス美術に関する図書に優れる。画家名検索が有効。

Books.or.jp

収蔵図書サイトではないが、国内で発行され、現在入手可能な書籍を収録する書籍  
検索サイト。収録データは、各出版社から提供された書籍情報を、日本書籍出版協  
会の「データベース日本書籍総目録」に蓄積したものである。入手可能な既刊分約八十萬  
点。データは日次更新。

#### b. 冊子体目録で探す

以下の目録も、必要な際には併用することが望ましい。『日本件名図書目録 一  
五 芸術・芸能・スポーツ』(一九八六、一九九六)、『翻訳図書目録』(一九八四、  
九五)。美術館図書室等の蔵書目録の労作もある。『埼玉県立近代美術館・蔵書目録  
一』(一九八四年)、『静岡県立美術館図書資料目録』一九八五年度版、別に、増補  
版、同一九八六年度版)、『福岡市総合図書館蔵河北倫明文庫目録』(二〇〇二年)。

#### 3 雑誌に掲載された記事・論文を探す・・・雑誌記事索引の活用法

『芸術新潮』、『美術手帳』、あるいは、大学研究紀要、学会誌などの雑誌に掲載さ  
れた資料を探したい時には、主に先ず以下の方法で調べ始める



## a. インターネットによる場合

●CiNii <http://ci.nii.ac.jp/>  
Citation Information by NII の略。国立情報学研究所 (NII: National Institute of Informatics) が運営する学術文献のデータベース。正式名称は NII 論文情報ナビゲーター。紙媒体の学協会誌 (紀要も含む) に掲載された論文本文を PDF として保存している。保存している論文はその一部が有料で、残りは無料で公開されている。PDF になっていないものでも、書誌情報が詳しく、極めて有用である。

●RIHA <http://www.riha-journal.org/>  
美術史専門とし無料のオンラインジャーナル

## ●JSTOR

論文の検索ができるだけでなく、*Art Bulletin* をはじめとした、洋書雑誌の中の論文自体が PDF 化されており入手、印刷が可能。論文によっては、色彩図版も見られる。大学が公的に登録してある場合は、キャンパスの中の LAN からアクセスができる。

## b. 冊子体の索引を使う場合

### b-1 美学美術史系一般誌索引

星山晋也 (監) 『美学・美術史研究文献要覧 (一九八五―一九八九)』日外アソシエーツ (編)、一九九六年、二〇世紀文献要覧体系、三〇。

同 『美学・美術史研究文献要覧 (一九九〇―二〇〇九)』日外アソシエーツ編、一九九九年―、全四巻。近年に刊行されたものは、内容によって分類がなされているこの索引で先ず調べる。

『雑誌記事索引、人文・社会編、累積索引版、芸術、芸能 (スポーツ)』  
国立国会図書館 (監)、日外アソシエーツ (編)、

☆昭和二三〜二九年、☆三〇〜三九年、☆四〇〜四四年、☆四五〜四九年 ☆五〇〜五四年、☆五五―五九年、☆六〇―平成六年、のそれぞれの間における刊行物を採録した七種がある。

また各々には、総合索引として、著者名索引と、たとえば、「バロック美術」などというような、件名索引の巻が補遺として存在するので、まずこの巻から引き始めるとよい。各巻で必要な項目を探せば相当数の雑誌資料を見つける手がかり得られる。(同系統の索引としては、『芸術・美術に関する・・・年間の雑誌文献目録』日外アソシエーツ、もある)。

### b-2 同専門誌索引 (東西交渉史からの視点も含む)

『美術史総目録』(一一一〇〇、一九五〇—一九七六年)、一九七七年、美術史学会。過去の号の目次一覧 <http://www.soc.nii.ac.jp/jahs2/c-kaishi-mokuji-2.htm>

『美学・目録篇』(一一一〇〇、一九五〇—一九七五年)、一九七八年、美学会。

『芸術新潮索引』(一一三〇〇)、学習院短大、鈴木和生編、一九八四年刊行、全二巻。

『日本東洋古美術文献目録』中央公論美術出版、一九九九年(一九三六—一九六五年刊行物所載)、二〇〇五年(同一九六六—二〇〇〇年)

『国華索引』(一一一〇二九)、朝日新聞社、一九八一年(一〇三〇号以降は、各編の第一冊に前年の索引が付記される)。

『日本美術年鑑』東京国立文化財研究所、主要美術展覧会の一覧の他に、定期刊行物所載文献がわかる。以上三件は、東西交渉史、南蛮美術研究に有効。

更に關心のある方々には、『学会年報・研究報告論文総覧』一九九八—二〇〇四年、第二巻が人文・芸術篇。『仏教美術文献目録』、『浮世絵文献目録』。また、『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』一九八五年、全一三巻。「件名編2」にある「芸能・芸術」(七〇八—七四二頁)

この他の索引一般については、

『人文社会翻訳記事論文索引』(二九八一—一九九〇)『日外アソシエーツ(編)一九九九年、西洋美術史の場合、欧文原綴の著者名から、西洋の研究者の翻訳が探せる。

より一般的には、大久保久雄編「文献を探索するための文献一覧」『学術論文の技法(新訂版)』(斉藤孝・西岡達裕)、日本エディター・スクール出版部、二〇〇五(一九七七)年、一五七—一九〇頁、に詳しい。

#### 4 雑誌を収蔵している図書館を見つけるには、

このテキストには多くの雑誌論文を記述している。たとえば、ABなどの欧文雑誌、『美術史』などの和文雑誌、そして紀要論文や関連記事は、必ずしも、所属大学や美術館図書室には収蔵されていない場合が多い。そうした場合、先に紹介した次のサイトを使って収蔵機関を探すこととなる。

Cinii Books

#### 5 文庫・新書目録

美術書が高額なことはいままでもない。関連した図書の場合も含めてせめて文庫・新書で同一のものが手にはいれば、とはだれしもが思う。このテキストでも努

めて、文庫・新書での基本図書を紹介した。そうした図書の入手の可否を調べたりする場合に役に立つのが各社の無料の文庫・新書目録だが、それらをまとめた次の目録類は、調査には一層有用である。

『岩波文庫総目録 一九二七―八七』岩波文庫編集部編、一九八七年。特に美術研究者には、岩波文庫以外に翻訳のない、しかも絶版ものを探す時などに、その「分野別書名索引《音楽・美術》」が役に立つ（二五六頁）。また、画像研究には、『ギリシャ・ラテン文学』、『日本文学古典』、『哲学・宗教』、『日本思想』、『東洋思想』、『仏教』、その他。

『総合文庫目録』総合文庫目録刊行会、現在入手可能な文庫を扱う。

『新書総合目録』新書総合目録刊行会、現在入手可能な新書を扱う。

## 6 展覧会カタログの目録

『東京都現代美術館所蔵・展覧会カタログ目録』二〇〇〇―二〇〇二年、二巻、本文編・索引編。

## 7 年表

〔西洋絵画とその周辺の文化に関して〕

チルヴァース（監）『ビジュアル年表で読む西洋絵画』（既出）

オナイアンズ（編）『世界美術史アトラス』東洋書林、二〇〇八年、薩摩・監訳。

樺山他（編）『クロニック世界全史』講談社、一九九四年、原色図版が多用されていて、平易に西洋史を理解するには、この中の関連した年代を先ず開く。

トレーガー『トピックス&エピソード世界史大年表』平凡社、一九八五年、邦訳・鈴木。

木村靖二他『世界史大年表』山川出版社、一九九二年。

〔東西交渉史に関して〕

宇野俊一他（編）『日本全史…ジャパン・クロニック』講談社、一九九一年。

『対外関係史総合年表』吉川弘文館、一九九九年。

太田博太郎・山根有三・河北倫明（監）『原色図典日本美術史年表』、増補改訂第三版、集英社、一九九九年。

## 二 美術書の購入をする

インターネットが主流となった現代では、書店もネット上での購入が先行している。代表的なものを挙げておく。

#### 新刊書

アマゾン（日本） <http://www.amazon.co.jp> このサイトでは、洋書も購入が可能。また、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ等にもアクセスが可能。

#### 古書

日本の古本屋 <http://www.kosho.or.jp/servlet/bookselect.Kihon>  
エイブ・ブックス（洋書の古書） <http://www.abebooks.com/>  
アマゾン <http://www.amazon.co.jp>

### 三 美術館図書室で学ぶ（東京を中心に）

美術書は高価であるのが一般的である。このテキストでも、可能なものは文庫・新書での資料を、英語文献でもペーパーバックを中心に紹介に努めたが、一般の、特に社会教育的な意味での学問を享受しようとする人々には、一般の大学図書館も閉鎖性が高い現実を考えるならば、残念ながら特に高額の大型美術書は容易に手が届くものではない。そこで、このテキストで引用したものが閲覧できる代表的な場所を、若干記しておきたいと思う。美術館付属図書室の存在である。一般の方々が、展覧会を鑑賞したあとで、展示作品に興味を持ち、それについて調べはじめようとした際には、まずこうした場所を訪れることをおすすめする。また、居住している地域の主要な美術館に、図書室の有無を問い合わせることを望みたい。

横浜美術館 美術情報センター（JR 桜木町駅、他）  
東京都美術館美術図書室（東西線木場駅、他）  
埼玉県立近代美術館図書室（JR 北浦和駅）  
府中美術館美術図書室（京王線東府中駅北口、他）  
東京国立博物館資料館（JR 上野駅）

## 補遺四 西洋十七世紀美術を学ぶための基礎文献案内

「戦前、日本で刊行された美術書を読んだ、美術史専攻の学生は、先ず全員が勉強を続ける自信を失ったものだ」という話をどこかで聞いたことがある。いささか奇妙に聞こえるかも知れないが、これは、言葉通り昔の学生たちの理解力が低かった、というのではない。それほど、この時代に出された和書が、なかでも翻訳書の質が、平易に理解できないほど悪かったということの意味している。それは無理もないことで、洋書もわずかしか手に入らず、また、翻訳者にせよ、実際に西洋に出かけて作品を見ることができた人々は、ほんのひとにぎりにしかすぎなかったからである。

それに比べると、現代では状況も一変した。西洋への理解も格段に進歩し、情報の入り方も遥かに早い。翻訳書、和書も未だ間違いはあるとしても、昔と比べると随分よくなったものである。例えば、新潮社の『世界美術辞典』に書かれた西洋美術史の項目は、一九八五年という刊行年を考えると、世界のレヴェルと比べても、事項などについてはそんなに内容的に見劣りするとも思われないのである。

こうした状況のなかで、十七世紀美術というものを理解するためには、どの道筋から入って行けばよいのか、と筆者は常々考えてきた。具体的には、英語の図書を読み始める前の、読み易い和書による道案内は何かということである。普通ならば、第5章で紹介した、ヴェルフリンの『美術史の基礎概念』の邦訳を先ず読みなさい、と教わるであろう。その次にはドルスの『バロック論』ともいわれるであろう。しかし、率直に言って、ヴェルフリンのこの名著を確実に終わりまで読みこなす人が、何人いるだろうか。ヨーロッパ人に自明なところは省略されたこの本では、写真もわずかな白黒だけであるし、バロック美術の何ものかが分かるには時間がかかり過ぎる。筆者の考えでは、この書は、ヨーロッパに在住し、日頃、バロックの作品を美術館や教会などで見なれている人々にとって初めて、意味がある書物に過ぎないのである。こういったとしても、ヴェルフリンがこの書のなかで、バロックというもの、の時代概念、あるいは様式概念を定式化し得たという、歴史的功績を否定するという意味ではない。もっと単純に、遙か極東の学徒向けの入門としての実際の効果、という視点からの評価である。

日本では当然のこと、收藏されたバロックの美術作品は数少ない。限られた期間の展覧会か、わずかな作品しかない美術館の常設展示だけである。音楽はまだまして、家庭でもテレビの音楽番組やFMのスイッチをひねれば、ヴィヴァルディやバッハの音楽が聞こえてくる。しかし、海外旅行をする人が増えて、西洋美術に対する関心も随分増したようだが、まだバロックだけを集中的に見に行く人は少ないだろう。そうした根拠から考えると先ず必要なのは、イメージを活用して、バロックにそこから入りその実体をいかに正確につかむか、ということである。

### 一 視聴覚資料

画像情報の大半は、インターネットのYoutubeや、Wikipediaにアップされた静止画像から入手できる時代である。そうした時代にあつて、美術史通史としての

性格を失わずに、また、西洋十七世紀絵画について基礎的な案内を示す視聴覚資料としては、

ヴィデオ・テープ

NHK（監修）、ビデオ『NHKルーブル美術館』全十三巻、第1巻・光と影の王国（スペイン黄金時代）、第10巻・バロックの峰（ルーベンスとレンブラント）、第11巻・太陽王の世紀（ルイ14世とベルサイユ）、

## 二 図書資料

次には文献である。それには、やはり①鮮明な色彩図版が大きく、また②数多く掲載された、そしてなおかつ③解説が日本人向けに平易であり、さらには④内容的に正確なものが、先ず挙げられるべきであろう。筆者の考えでは、回り道はしても、次に挙げた各資料を読みこなして初めて、ヴェルフリンが理解できるように思えるのである。なお、この案内では、(一)全集、またはそれに相当するもの、(二)辞典・事典に絞ってある。バロック関係の単行本は原則として引用していない。

### 1 どの本から読み始めるべきか・・・一般的概説書と概説的美術全集

(1-1) 入門用図書としては、

高階秀爾『バロックの光と闇』小学館、二〇〇一年。

同『バロックとロココ』岩波書店、二〇〇三年（一九八三年）、全集・岩波美術館、全二五巻、歴史巻第十室。平易な入門書。

高橋達史、他『バロックの魅力』同朋社、一九九一年、全集・グレイト・アーティスト、別冊。原色図版が鮮明で、西洋十七世紀絵画の総論的なイメージをよく伝えている。

宮下規久朗『バロック美術の成立』山川出版社、二〇〇三年、叢書・世界史リブレット

同『イタリア・バロック（美術と建築）』山川出版社、二〇〇六年、叢書。世界歴史の旅

(1-2) 概説的な配慮のある通史としては

中村俊春・望月典子・宮下規久朗・大野芳材『17・18世紀…バロックからロココへ、華麗なる展開』中央公論新社、二〇一六年、叢書・西洋美術の歴史、6、序章（3章）

(2) 美術史年表を使うならば、

チルヴァース（I）（監修）『ビジュアル年表、デ読む西洋絵画』二〇一四年、日本語版監修・木村三郎・本江邦夫、鐸木道剛、日経ナショナルジオグラフィック社、監修補佐・望月典子、安室可奈子、出羽尚、邦訳・田中敦子・岡崎秀。感心のある

時代を開けると、要を得た時代概説と、対応した年代の期日が得られ、作品解説もある。美術史通史の図書の次に読むべき図書である。「バロックから新古典主義」(一五六～二三一頁)。

### (3) 全集で調べるならば、

若桑みどり、神吉敬三、坂本満、高橋達史、他『バロック1・2』小学館、世界美術大全集、全二九巻、第十六・十七巻、一九九四年―一九九五年、内容が最も充実している。

高階秀爾、坂本満、他『ルーヴル美術館4』小学館、全集・ルーヴルとパリの美術、第二巻、全九巻、一九八六年。本来は個別美術館についての全集であるが、内容的には通史の機能をあわせもち、原色図版は特に優れている。

高橋裕子、他、講談社、全集・名画への旅、第十一―十四巻、一九九二―一九九四年、通史をテーマ別でわかりやすく説明していて、豊富な色彩図版もあり、参考になる(挿図3)。

土方定一、他『バロック美術』学習研究社、一九七七年、全集・体系世界の美術、全二十巻、第十六巻。

『ルネサンスロ、バロック、ロココ』朝日新聞社、一九八一年、全集・朝日百科、世界の美術、全十四巻、別巻一。カラー図版にすぐれる。第4巻がバロック美術を含む。

フーバラ『バロック・ロココ美術』グラフィック社、一九七九年、全集・西洋美術全史、全十三巻、第九巻、邦訳 前川、高橋(独版原著、HUBALA, 1971)。

## 2 関連した美術全集はどれを見るべきか

### (1) 絵画

『世界の巨匠シリーズ』美術出版社、一九六一―、既刊数十巻、主だった大画家個人を調べる時はこの全集から調べ始める。フェルメール(57・ウィーロック)、プッサン(20・フリードレンダー)、ベラスケス(49・セルリヤス)、エル・グレコ(17・ブロンスタイン)、スルバラン(38・ブラウン)、レンブラント(11・ミユンツ)など。

『カンヴァス世界の大画家』中央公論社、一九八一―八五年、全二〇巻、書かれた解説の質は、他を大きく凌いでいる。色彩図版も大きく、参考文献も詳しい。例・プッサン(木村・高階)、ルーベンス(高橋)、エル・グレコ(神吉)、レンブラント(高階)、ベラスケス(大高)、フェルメール(高橋)など。

『世界美術全集』集英社、一九七五―七六年、全一八巻、大きな図版が特色。小型版もある。ベラスケス(15・神吉)、プッサン(16・高階)、グレコ(14・吉川)、レンブラント(13・前川・兼重)、ルーベンス(12・嘉門)、カラヴ

アッジオ (11・若桑) など。

『アサヒグラフィ別冊美術特集・西洋編』朝日新聞社、一九九一年九四年(18・ベラスケス・雪山他、24・ルーベンス・高橋他、28・エル・グレコ・大高他)

『巨匠の世界』タイム・ライフ・ブックス、一九六九―七四年、全十八巻、西洋の専門家が執筆したもので、巻末には文献表がつく。例・レンブラント(ウエッジウッド)、リユーベンス(ウォレス)、フェルメール(ニコンスベルガー)。

『グレイト・アーティスト』同朋舎、一九九〇―九二年、全一〇〇冊の画集をまとめたもの。珍しい画家の号と作品がある。一〇〇号の総索引は、主題、事項、画家等から検索可能。珍しい画家としてが、カラッチ、ハルス、ライズダール、ロラン、等。

『新潮美術文庫』日本アート・センター編、一九七四―七六年、全五十巻、レンブラント(嘉門)、グレコ(神吉)、フェルメール(黒江)、ベラスケス(大高)、リユーベンス(坂本)等。

『ファブリ世界名画集』平凡社、一九七〇―七三年、全一〇〇冊、ほとんどの主要画家を含む。図版が大きくて便利。

『Les Classiques de l'art 古典美術全集』Flammarion, 仏語版絵画全集だが、色彩図版は極めて有用で部分図に優れる。カラヴァッジオ(3, Ottino Della Chiesa)、ベラスケス(12, Bardi)、レンブラント(18, Lecalano)、گرانピ(19, Prati)、ラ・トゥール(30, Thuillier)、プッサン(36, Thuillier)、スルズラン(38, Prati)、ムリリョ(55, Antonio Gaya Nuño)、ハルス(48, Montagni)、ロラン(49, Roethlisberger) など。

なお、近年、大幅な改訂増補版が出た巻がある。プッサン、ラ・トゥール。イタリア語版は、リッツォーリ社から出ているが、邦訳されているものもある(集英社)。レンブラント(10・嘉門)、ベラスケス(9・神吉)。

## (2) 素描

テュイリエ、他『ルーヴル美術館とパリの素描Ⅱ(17世紀)』講談社、一九九七年、THULLIER, etc., 邦訳・浦上。全六巻(一九九六―九七)は、素描の歴史としては通史の意味を持つ。MONNIER(監)、邦訳・諸川他、項目によっては、関連文献が明記される。

『世界の素描』講談社、一九七八年、全三六巻、画家の個人別デッサンの全集、例・ルーベンス(10・高橋)、レンブラント(11・兼重)。

モスコヴィッツ他(編)、『世界の素描体系』講談社、一九七六年、全六巻、監修・山田・小林・東山、邦訳・坂本他、国別の配列。



### (3) 版画

坂本満・吉川逸治・アデマール(編)『世界版画体系 *Gravure en Occident* (IV・17世紀)』筑摩書房、一九七三年、全十巻、ADHEMAR(作品解題・作者解説)、坂本(版画概論)。

坂本満・アデマール(編集・解説)『レンブラントとバロックの時代』全集・世界版画、筑摩書房、一九七九年、全十六巻、第六巻。

STRAUSS (ed.), *The Illustrated Bartsch, Arabis Books*, 1978, 刊行継続中。十九世紀初頭に刊行されたバルチュによる目録を基礎にその版画の図版を入れた浩瀚な全集。

*The New Hollstein Dutch & Flemish Enchings, Engravings & Woodcuts 1450-1700, Sound & Vision*, 1994, 刊行継続中。ホルシュタインが執筆した北方版画目録を新しく作成編集している全集。前全集とともに、これらの二点は画集であり、初学者にも十分活用が可能。

### (4) 彫刻

若桑みどり『バロック』小学館、世界彫刻全集、一九七五年、全十三巻、第十巻。数少ないバロック彫刻の入門書。

『ファブリ世界彫刻集』平凡社、一九七二―七三年、全二十巻、例・ベルニーニ(3・吉川)、ミケランジェロ(2・穴沢)。

### (5) 建築

磯崎新・篠山紀信・横山正『バロックの真珠―サン・カルロ・アツレ・クアトロ・フォンターネ聖堂』六耀社、一九八三年。全集・磯崎新・篠山紀信建築行脚、全十二巻、第九巻、篠山の手になる迫力のある写真によるバロック建築の代表作の紹介と横山の論文がある。

山田智三郎・桐敷真次郎『西洋Ⅲ・ルネサンス・バロック・ロココ・19世紀前半』平凡社、一九六二年、世界建築大全集、全十四巻、第八巻。

### (6) 工芸

『世界陶磁大観』講談社、一九七八―八〇年、翻訳監修、新・友部・長谷川、例・5・イタリア、6・フランス、7・イギリス・オランダ、8・ドイツ。図版に優れ、世界にも例の少ない大型本による紹介書。

## (7) 《美術館》

『ラ・ミューズ LA MUSE 世界の美術館』講談社、一九九二―一九九四年。世界の五十の美術館の収蔵作品を扱う。質の高い色彩図版がある。美術館別に調べる際には便利。海外旅行の時は先ずこの図書を聞く。第五十巻に総索引。

☆英語版ペーパーバックでの概説的な全集

西洋十七世紀美術史を、少し専門的に調べようとした時には、「ペリカン美術史 Pelican History of Art」の概説シリーズの中の、十七世紀前後を扱ったものから始めるのがよい。改訂増補版も含む、Yale U. P. のものがよい。フランスについては、BLUNT(1999, pbk.; 1957)。イタリアは、WITTKOWER(1999, pbk.; 1958)。フランドルは、VLIEGHE(2004, pbk.)。絵画史だけでは、オランダは、SLIVE(1993, pbk.)。イギリスは、WATERHOUSE(1994, pbk.; 1953)。  
なお、ハード・カバーの叢書は、世界美術史としての性格を持つ。

### 3 百科事典・美術辞(事)典

十七世紀絵画を中心に基礎的なことから簡単に調べるには、先ず辞(事)典である。ここではそのための基礎的なものを列挙した。この項目では、それぞれの分野で、先ず初めに参照することを薦めたいものを、冒頭に置いてある。

#### (1) 百科事典(の中で美術史研究に有用なもの)

##### 一般百科事典

『世界大百科事典』平凡社、二〇〇七年(一九八五年)、全三四巻、執筆者名の入る美術項目には優れたものが多い。関連した色彩図版。小項目に関しては、『新潮世界美術辞典』の次に開くとよい(美術史関連項目編集、柳・高階、他)

『大百科・丸善エンサイクロペディア』丸善、一九九五年、原色図版が多く使われ、美術史関連項目はわかりやすい。美術史を文化全体のなかで理解するには格好の入門的百科(西洋美術関連項目編集・辻・島田・木村)。

『日本大百科全書』小学館、一九八八―一九八九年、全二五巻。図版が多く、また、和書の参考文献が引用されている(西洋美術関連項目、中山、友部、桑原他)。

ギブニー(編)『ブリタニカ国際大百科事典』テイビーエス・ブリタニカ、一九九五年、全二十巻、第三版、GIBNEY. 大項目が多いが、巻末にある参考文献は有用(美術関連項目、吉川、坂本、神吉、他)。

*The Encyclopaedia Britannica, Encyclopaedia Britannica, 30 vols. 1974.*

本稿では、初学者向けという趣旨から、原則として英語以外の洋書は紹介を避けている。しかしながら、色彩図版と参考文献の入っている、仏・独・伊語の百科事典は、第二外国語の学習を始めて間もない学生諸君たちにも意味が大きい。初等文法の知識だけでも、意欲のある学生諸君には、手が届く範囲のものである。

*Grand dictionnaire encyclopedique Larousse, Larousse, c1982- c1985, 15 vols.*  
二十世紀末刊行の仏語百科としては一番の価値を持つ。色彩図版を多用し、また参考文献を記述した美術項目に優れる。十九世紀ラールの方針を引継ぎ、図像項目にも力を入れている。美術史関連項目、人名にも基本である。

*Brockhaus Enzyklopadie, Brockhaus, 2006, 30 Bände, 色彩図版と適切な参考文献。*

*La piccola Treccani, 1995-97, Istituto della enciclopedia italiana, 14 vols.* 極めて高度な画質を見せる色彩図版。イタリアの美術家の調査には、有用。地誌的な図版に優れる。

## 時代百科事典

GRENDLER (ed.), *Encyclopedia of the Renaissance*, Scribner's Sons, 1999, 6 vols. ルネサンスという時代の百科事典。十七世紀研究との関連で、前時代の美術史とその周辺領域との関係を調べる際に先ず開くとよい。中項目主義で読みやすく、参考文献がある。

CAMPBELL, *The Oxford Dictionary of the Renaissance*, Oxford UP, 2003, 小項目主義で、参考文献が有用。

KORS (ed.), *Encyclopedia of the Enlightenment*, Oxford University Press, 2003, 4 vols. 前書と同じように時代百科事典。十七世紀美術の十八世紀への影響、関係を調べる際に有効。中項目主義で読みやすく、参考文献がある。

## (2) 美術史全般の人名と事項を調べるには

『新潮世界美術辞典』新潮社、一九八五年、小項目主義で、項目数が多い。現在でも、先ず、この辞典を基準が基準とされる。作家項目だけでなく、図像、批評史などの美術史専門用語にも有用。

若桑みどり (監) 『世界美術大事典』小学館 全六巻、一九八八―一九〇年、優れた原色図版が多く、画集としての役割も持つ。大項目の項目が多く、一方でイタリア関係項目に優れる。図像項目もある。初学者は、原色図版で作品を確認することが重要で、先ずこの事典を開けることを勧めた

OSBORNE, *Oxford Companion to Art*, Clarendon Press, 1970. 豊かな巻末の欧文参考文献は現代でも有用。  
佐々木英也(監)『オックスフォード西洋美術事典』講談社、一九八九年、OSBORNEの邦訳。前二者にはない、たとえば、フランス十七世紀美術に関する項目が発見できる。

DURO/GREENHALGH, *Essential Art History*, Bloomsbury, 1992, pbk 簡易事典だが、相対的に少ない項目ながら、絞り込まれた参考文献があり有用。  
デューロ・リーン・ハルシュ『美術史の辞典』東信堂、一九九八年、邦訳・中森・清水、邦訳があるものを追加してあり、簡単に調べるには便利。DAや、『新潮美術辞典』と併用するとよい。

TURNER (ed.), *Dictionary of Art*, Grove, 1996, 34 vols. 図版は少ないが、たいへん平明な英語で書かれていて、圧倒的な情報量を誇る。本章の使用方法については、後段で詳述している。

*Encyclopedia of World Art*, McGraw-Hill, 1959-87, 17 vols. 英語版の世界美術百科事典(原著は伊語版 1958)。少し年代的に古い記事が多いが、内容的には古典的な内容を含むものも多い。各巻末の色刷り図版等は数も多く、画集的な性格も強く役にたつ。Indexの巻は、同一主題の検索に役立つ。ここに含めた補遺二巻(MYERS, EGGENBERGERS, ed.)は、一九八〇年代の情報を含む。

GAZE, *Dictionary of Women Artists*, Dearborn, 1997, 2 vols. 女性美術家事典。たとえば、女性画家、アルテミジア・ジェンティレスキについては、詳しく最新の参考文献と展覧会歴、生涯、作品が記述されている。

CHILVERS, *The Concise Oxford Dictionary of Art and Artists*, Oxford Reference, 1990, 英語版 pbk. 初学者用の、ハンディーな事典。研究者の項目なども含む。

『國史大辞典』吉川弘文館、一九七九—一九九七年、全十七巻、純粋な美術事典ではないが、美術史項目にも優れ、東西交渉史の視点から十七世紀美術を考える際に、先ず参照すべきもの。

『日本歴史大事典』小学館、二〇〇〇—二〇〇一年、全四巻、色彩図版のある美術史関連項目がある。

(西洋美術史における美術辞典紹介としては、以下の二点を参照されたい。太田穂穂「フランス19世紀美術事典の成立と展開」『アート・ドキュメンテーション研究』十号、二〇〇三年、五〇—六八頁。一瀬あゆみ「19世紀フランスで出版されたポルトガル美術文献」『アート・ドキュメンテーション研究』二〇〇六年、十三号、五一—五八頁。)

### (3) 絵画事典

利倉隆・山浦英一(編)『西洋絵画史 Who's Who』美術出版社、一九九六年。初學者向けの入門的画家事典。色彩図版が多く、手元に置く最初の一冊としての価値がある。

黒江光彦(監)『西洋絵画作品名辞典』三省堂、一九九四年、ルネサンスから現代までの約六三〇名の画家の、約三万点におよぶ作品の基礎データを収録。文献案内を含む。個々の画家を調べる際には、この辞典から始めるとよい。

WRIGHT, *The World's Master Paintings*, 2 vols. Routledge, 1992. 初期ルネサンスから現代までの一三〇〇人の画家についての作品リストと最新の文献案内がつく。下巻には、主題索引がある。画家研究の最初に使用するとよい。

GEALT, *Painting of the Golden Age*, Greenwood Press, 1993. 西洋十七世紀絵画に特化した事典。

MARTIN (ed.), *Illustrated Dictionary of 17th Century Flemish Painters*, Renaissance du Livre, 1994, 3 vols. ブランドル十七世紀絵画に特化した画家事典。

### (4) 版画事典

室伏哲郎『版画事典』東京書籍、一九八五年。基本的には現代版画についての事典であるが、西洋古典作品についての記述が認められ、図像項目もあり、また、技法についての原綴の確認などができる。

BRYAN, *Bryan's Dictionary of Painters and Engravers*, Bell and Sons, 1919 (1903-1904), rev. ed. 5 vols. じやぢか古い時代のものであるが、英語版における基本辞典。近年の版画(家)研究には、DA を参照されたい。

英語での版画家事典としての価値を持つ HP としては、  
<http://www.printcouncil.org/search.html>

(田中麻野「西洋版画研究における基礎文献紹介」『アート・ドキュメンテーション研究』二〇〇七年、十四号、三十七頁)の中に、本格的な版画研究書誌の紹介がある)

### (5) 彫刻事典

BOSTROM (ed.), *The Encyclopedia of Sculpture*, Dearborn, 2004, 2 vols.

### (6) 建築事典

ペヴスナー、他『世界建築事典』鹿島出版会、一九八四年、鈴木博之・監訳(英語

版 pbk.原著' PEVSNER, etc. *The Penguin Dictionary of Architecture*, 1966. 関連図版、参考文献については、独語版' Prestel, 1992 参照) .

青木繁、他『建築大事典』彰国社、一九七四年。

#### (7) 工芸事典

CAMPBELL(ed.), *The Grove Encyclopedia of Decorative Arts*, Oxford UP., 2006, 2 vol. 参考文献。 *Dictionary of Art* 刊行(1996)以降のレータも記述やれつる。

FLEMINB and HONOUR, *Dictionary of the Decorative Arts*, Penguin, 1979 (1977) 英語版 pbk., 参考文献。

OSBORN (ed.), *The Oxford Companion to the Decorative Arts*, Clarendon Press, 1975, 参考文献。

#### (8) 室内インテリア事典

BANHAM(ed.) and SCHRIMPON(pict.ed.), *Encyclopedia of Interior Design*, 1997, Dearborn, 2 vol. シノワヅリーをはじめ室内の工芸史研究には参考文献等、豊富な情報が得られる。

#### (9) 美術史用語事典

専門用語は、『新潮世界美術辞典』、『世界大百科事典』(平凡社)で先ず調査すべきであるが、より詳しい情報や、視点の異なった調査のためには、

高橋裕子『西洋美術のことば案内』小学館、二〇〇八年、 色彩図版が豊富な入門書

益田朋幸・喜多崎親(編著)『岩波西洋美術用語辞典』岩波書店、二〇〇五年

MEYER, *A Dictionary of Art Terms and Techniques*, Crowell, 1969, 英語版 pbk. 基本的な専門用語事典

MICHAUX, *Elsevier's Dictionary of Art History Terms*, Elsevier, 2005, 専門用語を英語・仏語の対訳で示す。

#### (10) 美術史家辞典

Dictionary of Art Historians  
<http://www.dictionararyofarthistorians.org/>

#### (11) 美術家索引・美術作品索引

恵光院日(編)『美術家索引』日外アソシエーツ、一九九一―九二年、日本・東洋編、西洋編、全二巻、美術家に関する辞(事)典項目の記述だけでなく、国内で開催された展覧会カタログの関連情報が美術家別に載っている。展覧会カタログに書かれた執筆内容を活用するには、先ずこの索引を開くべきである。

『西洋美術全集絵画索引』日本図書館協会、一九九九年。

『西洋美術作品レファレンス事典』日外アソシエーツ、二〇〇五年。

以上2点は、美術全集に採録された作品の索引。同一主題の絵画を探す際に極めて有効である。

### (12) 技法・文化財保存事典

ニコラウス『絵画鑑識事典』美術出版社、一九八八年、黒江光彦(監)、邦訳・黒江信子(原著独語版、NIKOLAUS, 1982)。絵画の価値、来歴の裏付けを取るために、実際の視点から執筆された事典。原色図版も多く、技術面からも貴重。ゲッテンス・スタウト『絵画材料事典』美術出版社、一九七三年、邦訳・森田恒之(独語版原著、GETTENS, STAUT, 1966)。

ピアス『西洋美術史小辞典』美術出版社、一九九一年改訂版(一九六八年)、邦訳・大西廣、他、

### (13) 服飾事典

石山彰『服飾事典』ダヴィッド社、一九七二年。

### (14) 美学・哲学事典

#### 14-1 美学

美術批評史の領域で基礎的な概念を理解するには、

竹内敏男『美学事典』弘文堂、一九七四年。

ヘンクマン・ロッター(編)『美学のキーワード』勁草書房、二〇〇一年、後藤狷士他監訳(独版原著、HENCKMANN, LOTTER, 1992) 邦訳段階で、「美学の基本文献」などの和文情報が追加されており、有用。

佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会、一九九五年。

KELLY(ed.), *Encyclopedia of Aesthetics*, Oxford U.P., 1998, 4 vol.

「ハンドブック」

上倉庸敬「ルネサンスのフランス古典主義の美意識」(『美の変貌・・・西洋美学史の展望』世界思想社、一一七～一三七頁)

## 14-2 哲学

廣松涉他(編)『岩波哲学・思想事典』岩波書店、一九九八年。

WIENER(ed.), *Dictionary of the History of Ideas*, Scribner, 1973-74, 5 vol. 英語版 pbk. 編集顧問に GOMBRICH が参加して、美学美術史にとっても重要な論考がある。邦訳・荒川幾男他(編)『西洋思想大事典』平凡社、一九九〇年、五巻、参考文献に邦訳情報が追加されている。

HOROWITZ(ed.), *New Dictionary of the History of Ideas*, C. Scribner, 2005, 6 vols. 前掲書の英語版原著の改訂的な性格があるが、若干編集方針が変わり、最新情報に富む。併用が望まれる。

## (15) 世界文学事典

菅野昭正他(編)『集英社世界文学大事典』一九九六―一九九八年、全六巻

同『集英社世界文学事典』二〇〇二年

『江川卓他(編)新潮世界文学事典』増補改訂、一九九〇年

英語版の入門的文学事典としては、*Oxford Companion to... Literature* のシリーズの中の各国文学版(English, French, German, etc.)が有用。

## (16) 画像学事典

岡田温司(監)『「聖書」と「神話」の象徴図鑑』ナツメ社、二〇一一年

ホール『西洋美術解説事典』河出書房新社、一九八八年、高階秀爾(監)、邦訳・沼辺信一、他、密度の濃い情報がある。(原著、英語版 pbk. HALL, *Dictionary of Subjects and Symbols in Art*, Icon, 1974)

カリーゴム『西洋美術鑑賞解説図鑑』東洋書林、二〇〇四年、高橋明也(監)、邦訳・川野美也子、色彩図版に優れた入門事典。英語版 pbk. CARR-GOMM, *The Secret Language of Art* (2001) 2008.

荒俣宏『世界大博物図鑑』平凡社、一九八七―一九九四年、全七巻、動物図像を中心に、



博覧強記な著者ならではの図像学百科事典。

ROBERTS, *Encyclopedia of Comparative Iconography*. Dearborn, 1998, 2 vol. 「誘拐」「死」のような抽象概念や、「読書」「表情」などの、多彩な項目を立てていて、図像学研究の導入を試みている。多数の参考文献。

(この他は、拙著『名画を読み解くアトリビュート』淡交社、二〇〇二年、一四四―一四八、一五三頁を参照されたい)。

## 16-1 キリスト教主題について

関連した主要な作品のカラー図版を探すには  
諸川春樹(監)『カラー版・西洋絵画の主題物語Ⅰ(聖書編)』美術出版社、一九九七年

しっかりと調べるには

柳宗玄・中森義宗(編)『キリスト教美術図典』吉川弘文館、一九九〇年

名取四郎他(編)『岩波キリスト教辞典』岩波書店、二〇〇二年

『キリスト教大事典』教文館、改訂版、一九八三年。

『カトリック大辞典』上智大学(編)、富山房、一九四〇―六〇年、全五巻。

『キリスト教人名辞典』日本キリスト教団出版会、一九八六年。

『新カトリック大事典』研究社、一九九六―二〇一〇年、全六巻

GROSS and LIVINGSTONE (ed.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, Oxford UP, 1997(1957), 若干専門的なキリスト教関係の事項には先ず「」の事典。

HILLERBRAND (ed.), *The Oxford Encyclopedia of the Reformation*, Oxford UP, 196, 4 vols. 宗教(反)改革関係の事項には「」の百科事典。

FARMER, *Oxford Dictionary of Saints*, Oxford Reference, 1978, 英語版 pbk. 初学者が手元に置いてよい図書。

## 16-2 キリシヤ・ローマ神話・歴史の主題について

関連した主要な作品のカラー図版を探すには

諸川春樹(監)『カラー版・西洋絵画の主題物語Ⅱ(神話編)』美術出版社、一九九七年

しっかりと調べるには

松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、二〇一〇年  
膨大なデータを集めた近年の収穫。

高津春繁『ギリシヤ・ローマ神話辞典』岩波書店、一九六〇年。和書で最も信頼度の高い辞典。

グラント・ヘイゼル『ギリシヤ・ローマ神話事典』大修館、一九八八年、西田実訳（主幹）、図版が多い（英語版原著 GRANT, HAZEL, 1973）。

REID, *The Oxford Guide to Classical Mythology in the Arts, 1300-1990s.*, Oxford UP, 1993, 2 vols. 膨大な数の関連作品を収集している。多数の典拠、参考文献を明示。

SMITH (ed.), *A Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythology*, Tauris, (1880) 2007 復刻版, 3 vols. 古典的な名著。

HORNBLLOWER and SPAWFORTH (ed.), *The Oxford Classical Dictionary*, 3rd ed., rev, Oxford UP, 2003(1947). 執筆者の書名入り記事。近年改訂された名著で、旧版に較べ、情報も最新のものを集めている。図像関連項目だけでなく、広く、古典古代に関する項目がある。

### 16-3 肖像・モデル事典

『美術作品レフェランス事典（人物・肖像篇）』日外アソシエーツ、二〇〇七年、たとえば、ルーベンスの妻であった、エレース・フルマンを引くと、彼女を描いた多くの作例と全集関連図版が発見できる。

JIMINEZ, *Dictionary of Artists's Models*, Dearborn, 2001, 前事典と同じように引くと、フルマンの生涯と、本格的な参考文献が見つかる。

### 16-4 アトリビュート・シンボル辞典

前掲書・拙著『名画を読み解くアトリビュート』一四五―一四九頁を参照されたい。

ビーダーマン『図説世界シンボル事典』八坂書房、二〇〇〇年（独語版原著、BIEDERMANN, 1989）

### (17) 人名辞典

相田重雄他（監）『コンサイス外国人名事典』三省堂、一九九九年（第三版）（美術史関連項目・柳・青柳・鈴木、他）。

『岩波世界人名大辞典』岩波書店辞典編集部（編）、二〇一三年、岩波書店、全二巻

(美術史関連項目。森・他)

『岩波西洋人名辞典』岩波書店、一九八一年(増補版)。

(18) 地名辞典

谷岡武雄(監)『コンサイス外国地名事典』三省堂、一九九八年(第三版)。

(19) 西洋外国語辞典

語学の専門家による執筆・編集だけでなく、美術史関連専門用語の邦訳に関しては、美術史研究者が校閲等に参画しているものを選んだ。

英語

『小学館ランダムハウス大辞典』一九七三年(版画・中林)。

『ジーニアス英和大辞典』二〇〇一年、大修館、専門語校閲(山梨)

仏語

『小学館ロベール仏和大辞典』一九八八年、専門語校閲(美術史他・木村、絵画技術他・黒江、版画・岩井、工芸・樋田)。

伊語

『小学館伊和中辞典』(第二版)一九九九年、専門語校閲(絵画・彫刻、裾分・濱谷)。

蘭語

『講談社オランダ語辞典』一九九四年、執筆(協力)・高橋。

スペイン語

『小学館西和中辞典』一九九〇年、専門語校閲(大高)。

(20) ハンド・ブック

20-1 美学・美術史

ポイントン『はじめての美術史』スカイトア、一九九五年、邦訳・木下。

英語版原著 pbk. : POINTON, *History of Art, A Student Handbook*, Routledge, 4 ed. 1997(1980).

マイナー『美術史の歴史』ブリュッケ、二〇〇三年、邦訳・保井他、英語版原著 pbk. MINOR, *Art History's History*, Prentice Hall, 2d ed. 2007(1994).

JONES, *Art Research Methods and Resources : a Guide to Finding Art Information*, 2nd ed., rev. and enl. 1984(1978), 英語版 pbk.

BARNET, *A Short Guide to Writing about Art*, Prentice Hall, 2007. 英語版 pbk.

当津武彦編『美の展望・・・西洋美学史への展望』世界思想社、一九八八年。

COOPER, *A Companion to Aesthetics*, Wiley-Blackwell, 1995, 英語版 pbk.

太田喬夫編『芸術学を学ぶ人のために』世界思想社、一九九九年。」

## (21) 文献案内 (和書を中心とする)

既出の本格的な美術全集には参考文献が付いているが、ここでは広い視野で参考文献を集めているやや本質的なものに絞って指摘したい。

『楽しい美術本ガイド』美術出版社、一九九四年。幅広く基本図書を集め。解題を付した労作。読書案内としては先ずこの図書から。

高階秀爾『美の思索家たち』新潮社、一九六七年。批評史に関して優れた解題。書誌案内。

## 21-1 十七世紀美術を中心とした西洋美術全般

神吉敬三・若桑みどり(編)『バロック1』全集・世界美術大全集(既出)、第十六巻、一九九四年、四七八―四八二頁、

坂本満・高橋達史(編)『バロック2』同全集、第十七巻、一九九五年、四九〇―四九四頁。

千足伸行(監)『新西洋美術史』西村書店、一九九九年、四五四―四五五頁。

吉川逸治(監)『西洋美術史』美術出版社、四三―五四頁、四章には、日本におけるバロックの受容が理解できる。

『バロック美術』既出、全集・体系世界の美術(既出)、第十六巻、四〇六―四一七頁、各ジャンルだけでなく、一般の概説が参考になる。

FELTON, 《Southern Baroque》; WHEELLOCK, 《Northern Baroque》, *ENYA*, XVI, 1983, 英語文献によるバロック研究案内。

DOWNES, 《Baroque》, 1996, *DA*

21-2 各分野

## 21—2—1 絵画

『カンヴァス世界の大画家』（中央公論社）の巻末には相当高度な情報がある。

CROPPER and DEMPSEY, « The State of Research in the Italian Painting of the Seventeenth Century »; HAVERKAMPBK.EGEMANN, «The State of Research of in Northern Baroque Art», *AB*誌, 1987.

## 21—2—2 版画

坂本満「版画散歩―枝道編5」『ガレリア通信』（ガレリア・グラフィカ）一九八六年、23、二―四頁。わかりやすい解説がある。

佐川美智子他、『版画の技法と表現』改訂版、一九九一年、町田国際版画美術館、一七九―一八七頁。

グリフィス『西洋版画の歴史と技法』（二〇一三年、中央公論美術出版、邦訳・越川倫明他、一三三―一四二頁、原著・英語版 GRIFFITHS, 1996.2010）

青木茂（監）『カラー世界版画史』美術出版社、二〇〇一年、一八九―一九三頁。近年の資料も拾っている。

田中麻野「西洋版画研究における基礎文献紹介」『アート・ドキュメンテーション研究』二〇〇七年、十四号、十三―十七頁）

HIND, *History of Engraving & Etching*, 1923: 復刻版 Dover, 英語版 pbk.p.393-419.に詳しい情報がある。

SUFIELD, etc., « Prints », *DA*, 1996.

西洋十七世紀絵画を学ぶ際には、しばしば、隣接領域である、建築史・政治史・経済史、社会史、文学史、音楽史、宗教史等の分野の基礎知識が求められる。しかしながら、そのために必要になる入門書の選定は、必ずしも容易なことではない。ここでは、その点に注目した。一方で、各文献のなかでも、十七世紀について書かれている部分で、同時に、巻末等に、選ばれた日本語の参考文献を記述したものを中心にした。本格的な文献の指示は、それぞれそこに書かれており、その内容に従いたい。なお、西洋史系の文献については、田中佳徳島大学准教授から貴重な教えを受けた。

各文献の並べ方は、作品とその作品のある場所を認知することを優先する絵画史研究という視点から、先ず、色彩図版が多く採用されたものをはじめに置いた。その後、刊行年順を尊重する。

〔年表〕

樺山紘一、他(編)『クロニック世界全史』講談社、一九九四年

## 21-2-3 建築史

横山正『バロックの真珠』一九八三年(既出)、一八二―一八四頁

末永航・羽生修二『バロック建築』『西洋建築様式史』美術出版社、一九九五年、  
一―三―一二六頁)

中島智章『図説ヴェルサイユ宮殿・・・太陽王ルイ14世とブルボン王朝の建築遺産』(二〇〇八年、ふくろう)

同『図説バロック・・・華麗なる建築・音楽・美術の世界』(二〇一〇年、ふくろう)

同『イエズス会の教会建築』『教皇のバロック』『キリスト教会建築の歴史』(二〇一二年、ふくろう、八六―一二三頁)

佐藤達生『図説古典建築の流れ・・・バロック』『西洋建築の歴史』二〇一四年、  
ふくろう、増補新装版、七二―八三頁)

ペヴスナー『新版ヨーロッパ建築序説』彰国社、一九八九年、邦訳・山口他、四  
〇―四〇四頁。原著英語版 pbk. *An Outline of the European Architecture*,  
Penguin Books, 1983 (1943), p. 462-467

桐敷真次郎「近世」『西洋建築史図集』彰国社、日本建築学会(編)、一九八一年  
(一九五三年)、三訂版、六三―七三、一八三―一九五頁)

西田雅紹(編)『バロック建築・古典主義建築』『ヨーロッパ建築史』昭和堂、一  
九九八年、一六四―一九六頁)

桐敷真次郎『西洋建築史』(共立出版、二〇〇一年、叢書・建築学の基礎3、一七  
六―一七七頁)

陣内秀信、他「バロック」『図説西洋建築史』彰国社、二〇〇五年、一〇九―一二  
九頁)

## 21-2-4 政治史、経済史、社会史等について

中村道雄・吉田寅(編)『世界史のための文献案内』山川出版社、一九八二年

{フランス}

長谷川輝夫「ブルボン王朝の誕生」「戦う国王」「偉大な世紀の大王」「繁栄の時代

の国王」(『図説ブルボン王朝』二〇一四年、ふくろう、八〇八三頁)

佐々木真「宗教戦争とブルボン王朝の成立」『絶対王政の輝き』(『図説フランスの歴史』増補新版、二〇一六年、ふくろう、五四〇八五頁)

同『図説ルイ14世』(二〇一八年、ふくろう)

阿河雄二郎・服部晴彦「絶対王政期のフランス」(『フランス近代史』ミネルヴァ書房、一九九三年、服部・谷川編著、一〇四七頁)

高澤紀恵「宗教対立の時代」・阿河雄二郎「絶対王政期のフランス」・林田伸一「最盛期の絶対王政」(『フランス史2』山川出版社、一九九六年、柴田・樺山・福井編、叢書・世界歴史大系、一一三〇二四三頁)

林田伸一「近世のフランス」(『フランス史』二〇〇一年、新版世界各国史、福井編、一四四〇二三八頁)

〔イタリア〕

北原敦「スペイン支配期のイタリア」(『イタリア史』二〇〇八年、新版世界各国史、北原編、二六九〇三〇七頁)

〔スペイン・ポルトガル〕

立石博高「スペイン帝国の時代」(『スペイン・ポルトガル史』二〇〇〇年、新版世界各国史、立石編、一四一〇一八二頁)

〔イギリス〕

指昭博『図説イギリスの歴史』(二〇一五年、ふくろう、五八〇八一頁)

岩井淳「革命の時代」(『イギリス史』一九九八年、新版世界各国史、川北編、一七八〇二二二頁)

〔ドイツ・オーストラリア〕

加藤雅彦「オスマン・トルコ来る」『花開くバロック』『図説ハプスブルク帝国』(一九九五年、ふくろう、二五〇四四頁) (二〇一八年新版)

増谷英樹「神聖ローマ帝国とハプスブルク家の時代」(『図説オーストリアの歴史』二〇一一年、増谷・古田編、ふくろう、八〇二三頁)

増谷英樹「近代への序曲」(『図説ウィーンの歴史』二〇一六年、ふくろう、六五〇八三頁)

成瀬治「反宗教改革から三十年戦争へ」(『ドイツ史1』山川出版社、一九九七年、叢書・世界歴史体系、四六九〇五〇七頁)

坂井栄八郎「一六四八年以降の帝国と領邦」『ドイツ史Ⅱ』同前、一九九六年、三〇四頁

坂口修平「三十年戦争と絶対主義的劉邦国家の形成」『ドイツ史』、二〇〇一年、新版世界各国史、木村編、一〇五〜一三八頁

〔オランダ〕

佐藤弘幸「黄金時代のオランダ・黄金時代の経済と文化」『図説オランダの歴史』二〇一二年、ふくろう、五五〜九二頁

## 21-2-5 文学史

〔フランス〕

大島利治「The siècle」『フランス文学史ノート』駿河台出版社、一九八六年（一九七六年）、河盛好蔵、他著、補増新訂版、四一〜七二頁

田辺保・伊藤洋「17世紀」『新版・フランス文学史』白水社、朝比奈誼他（監）、（一九七三年）一九九二年、七一〜一二四頁

伊地智均・川田靖子・村田真弓・三井吉俊「ヴェルサイユの時代」他『フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社、一九九二年、田辺編、七一〜一二六頁

江花輝昭「17世紀」古典主義の興隆とその周辺『はじめて学ぶフランス文学史』ミネルヴァ書房、二〇〇二年、横山安由美・朝比奈美知子（編著）、シリーズ・はじめて学ぶ文学史3、七四〜一二三頁

〔イギリス文学〕

藤井治彦「王党派と清教徒の抗争の時代」『英文学を学ぶ人のために』世界思想社、一九八七年、坂本編、一〇二〜一二八頁

谷清「ミルトンの時代・・・17世紀の文学」『はじめて学ぶイギリス文学史』ミネルヴァ書房、一九八九年、神山妙子（編著）、シリーズ・はじめて学ぶ文学史①、六一〜九〇頁

富樫剛他「17世紀」『イギリス文学入門』（三修社、二〇一四年、石塚久郎（責任編集）、五二〜、八九頁、ちなみに「レポート・卒論を書こう」三九〇〜四〇一頁）

〔ドイツ文学〕

義則孝夫「新生と反動・・・宗教改革よりバロックへ」『ドイツ文学を学ぶ人のために』世界思想社、一九九一年、深見編、一一一〜一二六頁



石井正人「宗教と戦乱の時代・・・近世」(『はじめて学ぶドイツ文学史』ミネルヴァ書房、二〇〇三年、柴田翔(編著)、シリーズ・はじめて学ぶ文学史④、三七〇～三八頁)

## 21-2-6 音楽史

岸啓子「バロックの音楽・バロックの器楽」(『決定版・はじめての音楽史…古代ギリシアの音楽から日本の現代音楽まで』音楽之友社、二〇一七年、五三～六八頁)

戸口幸策『オペラの誕生』平凡社、二〇〇六年、平凡社ライブラリー(東京書籍一九九五年)

## 21-2-7 宗教史

テュヒレ(H)他『バロック時代のキリスト教』叢書・キリスト教史6、一九九七年、平凡社ライブラリー、編訳監修・上智大学中央思想研究所(独語原著・TUECHLE, 1965, etc.)

## 補記

本稿は、日本大学芸術学部の専任として着任して以来、四〇年に及ぶ、論者の研究成果の一端である。美術史研究者であり、同時に、ドキュメンタリストとしての論者の作業が可能になったのは、ひとえに、芸術学部図書館の、荒井隆志、戸田浩司、寺村美行、山崎恭子、満留円佳、辻村友子、近江初枝他の各氏のご尽力のたまものである。本稿には現れていない、国際水準にある、洋書参考図書も含め、長年にわたる、選書、そして配架についての、相互の意見交換と、その議論の積み上げがあつてはじめて可能になったものである。ここに、お世話になった全ての方々の名前を明記できないことは、残念であるが、深く謝意の気持ちを記しておきたいと思う。

なお、和洋の参考図書等の所蔵については、日芸蔵書検索システム OPAC

[https://artlib.nihon-u.ac.jp/opac/opac\\_search](https://artlib.nihon-u.ac.jp/opac/opac_search)を御参照いただきたい。